平成26年度公益財団法人JKA補助事業

教育現場のICT安全安心対策事業
実施報告書

平成27年3月

一般社団法人日本教育情報化振興会

この事業は競輪の補助金を受けて実施したものです。

目次

はじめに. 1
第１章 2
情報モラル指導充実のための事業 2
1. 事業の目的 3
2. 作業項目とスケジュール／作業体制 4
3. セミナー開催 6
4. 学習教材開発 16
5. 成果発表会 21
6. まとめ 22
第２章 23
コミュニケーション力育成のための事業 23
1. 事業の目的 24
2. 作業項目とスケジュール／作業体制 25
3. セミナー開催 27
4. 学習教材開発 45
5. 成果発表会 46
6. まとめ 47
第３章 49
ネットの使いすぎ撲滅のための事業 49
1. 事業の目的 50
2. 作業項目とスケジュール／作業体制 51
3. 弁別指標の開発 53
4. 学習教材の開発 55
5. 成果発表会 59
6. まとめ 60

はじめに

一般社団法人日本教育情報化振興会（略称：JAPET＆CEC）は、

平成２６年４月に、

旧　一般財団法人　コンピュータ教育推進センター（略称：CEC）と

旧　一般社団法人　日本教育工学振興会（略称：JAPET）が、

合併して誕生しました。

第１章
情報モラル指導充実のための事業

１．事業の目的

インターネットは、社会生活の一部となり、買い物や予約申込み等は電話よりもむしろインターネットを利用して行い、インターネット無しでは考えられないというほど、社会生活に浸透している。また、スマートフォンがフィーチャーフォンを上回って普及する現状では、インターネットへの入り口となる端末は、パソコン、携帯電話からスマートフォン、タブレット端末、ゲーム機、音楽プレーヤーのように多様化すると同時に、いつでも、どこでも、誰でもインターネットに接続して、利用できるものとなっており、児童・生徒は保護者の目の届かないところで利用できるようになった。

このように身近になったインターネットであるが、その利用により手軽に多くの情報を入手したり、見知らぬ人々とコミュニケーションを取ったり、自宅での買い物も手軽にできるなど、様々なことが手軽にかつ安全安心にできるようになると同時に、もう一方では児童・生徒が SNS や無料ゲームなどのコミュニティサイトで犯罪などに巻き込まれる事例も発生している。

JAPET&CEC では、児童・生徒の安全安心を願い「教育現場の ICT 安全安心対策事業」を展開しており、この中の一つの事業として「情報モラル指導充実のための事業」を実施している。

これまで、インターネットには危険な面があるということで児童・生徒をそれらから遠ざけるのではなく、子どもたち自身がインターネットを上手に使い、上手に付き合っていけるようにすることが大切であるという考え方に基づいて「親子のためのネット社会の歩き方セミナー」を開催してきた。これは、直接、児童・生徒と保護者に対し、ネット社会をどう歩いていけばよいのかを指導、啓発するセミナーであったが、学習指導要領の総則に「各教科等の指導にあたっては…情報モラルを身につけ…」と記載されたことを契機に、全ての教員が、全ての教科で情報モラル指導をできるように、その指導法、教材や現在児童・生徒の抱えている問題点など最新の情報を提供することを目的として、平成 23 年度から公益財団法人 JKA の補助をいただき、情報モラル指導の講師を育成すべく「情報モラル指導充実のための事業」を行い、教職員や教育委員会の指導主事などを対象としたセミナーを開催して、今年度はその 4 年目にあたる。正しい指導方法を広く展開することを重要な観点として、セミナー参加者がその地域の教育委員会や学校に戻り、そこで講師として指導ができるための教材と指導方法を伝える資料を用意し、裾野を広げるための活動としている。

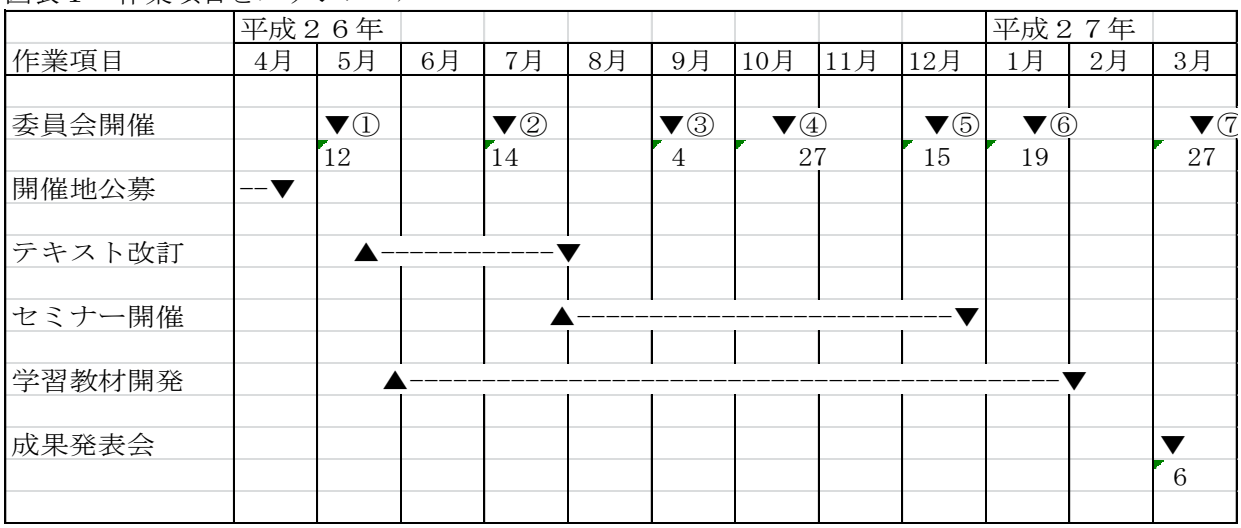
今年度は、新しい取り組みとして開催地域の広範化を図った。過去 3 年間は、都道府県及び中核市以上の地方自治体の教育委員会へセミナー開催を案内し申込のあった地域でのみセミナーを開催していた。今年度はこれに加え、JAPET&CEC 主催の「情報教育対応教員研修全国セミナー」の一プログラムとして、富士電機ＩＴソリューション株式会社の協力を得て名古屋市と東京都墨田区でセミナーを開催し、また、学校法人電子開発学園の協力を得て、名古屋市、大阪市、広島市、北九州市、福岡市と過去に開催していない地域でもセミナーを開催することができた。

２．作業項目とスケジュール／作業体制

(1) 作業項目とスケジュール

作業項目とスケージュールは下記の通りである

図表１　作業項目とスケジュール



(2) 委員会の設置

本事業では有識者で構成する「ネット社会の歩き方講師育成セミナー検討委員会」を組織して作業に取り組んだ。全 6 回の検討委員会を開催し、作業スケジュールの策定、セミナー開催地の公募と採択、セミナー用テキストの改訂、セミナー開催時の講師、学習教材の企画と開発、成果発表会での報告等、本事業の全体を管理した。

また、セミナー用テキストの改訂の実作業、セミナー開催地の教育委員会との連絡、セミナー開催準備、学習教材開発の実作業等は事務局が担当した。

図表２　委員一覧

所属	役職及び氏名
鳴門教育大学大学院	准教授　藤村　裕一
岐阜聖徳学園大学	教授　石原　一彦
東京女子体育大学	准教授　榎本　竜二
環太平洋大学	教授　梶本　佳照
東京都台東区立　浅草小学校	校長　木村　和夫
東京都台東区立　教育支援館	教育情報室長　佐久間茂和
千葉学芸高等学校	校長　高橋　邦夫
柏市立中原小学校	校長　西田　光昭
千葉大学教育学部　附属中学校	主幹教諭　三宅　健次

図表３　事務局等の体制

所属	役職及び氏名	役割
一般社団法人 日本教育情報化振興会	専務理事　鶴田　雅文	責任者
同上	事務局　次長　藤本　康雄	総括
同上	調査研究開発部　調査担当部長　田中　充	テキスト改訂
同上	調査研究開発部　シニアエキスパート　宮原　克彦	連絡窓口
同上	総務部　総務担当部長　赤松伊佐代	JKA 対応

(3) 委員会の開催

委員会は二カ月に１回の開催を基本としたが、検討すべき議題に応じて適宜日程を前後させた。また、急を要する場合にはメールによる検討・決議を行った。年度を通じて計六回の委員会を開催したが、それぞれの開催日、議題は下記の通りである。

図表４　委員会開催実績

開催回数	開催日	議題
第一回	26. 5.12	・年度スケジュールの確認 ・セミナー開催地採択と担当委員の選定 ・セミナー用テキスト改訂カ所の検討 ・新規開発の学習教材のテーマ検討
第二回	26. 7.14	・追加分のセミナー開催地採択と担当委員の選定 ・学習教材の担当委員選定
第三回	26. 9. 4	・学習教材のシナリオ検討
第四回	26.10.27	・学習教材の絵コンテ検討
第五回	26.12.15	・学習教材のアニメーションの確認
第六回	27. 1.19	・学習教材の音声の確認
第七回	27. 3.27	・今年度のまとめ

(4) 開催地の公募

開催地の公募は、教育委員会の意向もあり[1]前年度の 1 月より行った。JAPET&CEC の Web ページで公開すると共に、全国の都道府県と中核市以上の教育委員会約１００カ所へ下記内容の案内状を送付した。

1)テーマ

「情報モラル教育指導のポイント」

2)開催時期と時間

平成 26 年 6 月から平成 26 年 12 月の間の午後、最低 2 時間 30 分

3)対象受講者と会場あたりの定員

指導主事、教職員　　約 50 名程度（目安）

4)開催会場

地方自治体等の無償で利用できる会場　かつ　受講者がパソコンを使用可能な会場

5)セミナーの具体的な内容

講師育成セミナー検討委員会と貴教育委員会の協議で決定する

6)セミナーのプログラム（例）

・データから見るネット社会の現状
・情報モラルの指導（理論編および実践編）
・「ネット社会の歩き方」の活用
・その他の教材の紹介
・保護者との関わり
・問題発生時の対応
・ワークショップ

(5) セミナー用テキストの改訂

セミナー用テキストの中には、携帯電話の保有率やネット上のトラブル発生状況等、年々変化する数値データがあるため、中央省庁が発表している最新データに更新した。

また、世の中の動きを反映したセミナーとするために、委員の意見に基づき（過去一年間程度のネット上のトラブルやリスクの中から喫緊の課題と考えられる事案を取り込む）資料の差し替えを行った。

[1]通常、地方自治体の教育委員会は教員研修計画を前年度の二月頃に策定している。この計画に組み込むために、本事業で実施するセミナーの採択に関しても早期の決定を求められている。

３．セミナー開催

(1) セミナー開催

本事業で提供するセミナーは、全国の教育委員会が主催している教員向け研修会の一プログラムとして実施される場合が多い。この関係で、教員が比較的時間を確保し易い、夏休み期間に開催が集中している。教育委員会の指定が無い場合は以下のプログラムでセミナーを実施することとした。

図表５　セミナー開催実績

開催回数	開催日	開催場所	講師	人数
第　一回	26. 7.31	岐阜市教育研究所	石原　委員	73 名
第　二回	26. 8. 1	千葉市教育センター	高橋　委員	16 名
第　三回	26. 8. 1	第一ホテル両国 (協力: 富士電機 IT ソリューション株式会社)	木村　委員	230 名
第　四回	26. 8. 7	高松市総合教育センター	榎本　委員	92 名
第　五回	26. 8. 8	メルパルク名古屋 (協力: 富士電機 IT ソリューション株式会社)	藤村委員長	150 名
第　六回	26. 8.18	鹿児島市立学習情報センター	西田　委員	15 名
第　七回	26. 8.19	柏市立教育研究所	西田　委員	15 名
第　八回	26. 8.21	市川市教育センター	木村　委員	52 名
第　九回	26. 8.21	佐賀県教育庁(一部)	三宅　委員	38 名
第　十回	26. 8.21	佐賀県教育庁(二部)	三宅　委員	45 名
第十一回	26. 8.22	北薩教育事務所	三宅　委員	39 名
第十二回	26. 8.22	和歌山県教育センター	石原　委員	32 名
第十三回	26.11. 6	函館市 函館競輪場テレシアター	藤村委員長	37 名
第十四回	26.12.24	名古屋情報メディア専門学校 (協力: 学校法人電子開発学園)	佐久間委員	13 名
第十五回	26.12.24	大阪情報専門学校 (協力: 学校法人電子開発学園)	榎本　委員	10 名
第十六回	26.12.25	広島情報専門学校 (協力: 学校法人電子開発学園)	佐久間委員	18 名
第十七回	26.12.25	広島情報専門学校 (協力: 学校法人電子開発学園)	三宅　委員	12 名
第十八回	26.12.26	広島情報専門学校 (協力: 学校法人電子開発学園)	梶本　委員	17 名
合計				904 名

図表６　東京都墨田区両国ホテルでのセミナー風景（平成２６年８月１日）

図表７　市川市教育センターでのセミナー風景（平成２６年８月２１日）

図表８　佐賀県教育庁でのセミナー風景（平成２６年８月２１日）

図表９　函館市　函館競輪場テレシアターでのセミナー風景（平成２６年１１月６日）

図表１０　広島情報専門学校でのセミナー風景（平成２６年１２月２５日）

(2) セミナー開催団体の所感

セミナー開催団体の所感を以下に抜粋する。

1)児童・生徒の利用実態について理解することができた

2)情報モラルの指導は重要と考えているが、指導時間がなかなか確保できない

3)任意受講の研修ではなく悉皆研修にしないといけないのではないか。

4)WEB 教材を活用した具体的な授業イメージを得ることができた。

5)提供された教材を利用して授業をしてみたい。

図表１１　セミナー開催団体の所感

開催場所	講師	所感
岐阜市教育研究所	石原　　委員	・岐阜市では、7 月 15 日に岐阜市 PTA 連合会が中心となって、子どもの携帯電話やスマートフォン等の安全安心な使い方について、各家庭で話し合い、それぞれの実態にあったルールを決めて、よりよい生活を築いていく動きが起こっている。「禁止」ではなく、「よりよく活用するためには？」という指導へのシフトチェンジをしていきたい岐阜市にとって、今回いただいた話もワークショップの内容も、今後の実践に活かすことがイメージしやすい、わかりやすい内容であった。
千葉市教育センター	高橋　　委員	最新の情報をわかりやすく丁寧にご指導いただいた。また、豊富な資料を用意していただいた。受講生の感想を抜粋する。 ・毎年ながら新しい情報をたくさんいただいて、校内等でたいへん役に立っています。 ・自主的でなく、全職員が研修すべき内容だと思います。もう知らない、わからないでは、済む状況でないということを自覚して。
第一ホテル両国 (協力: 富士電機 IT ソリューション株式会社)	木村　　委員	・情報担当ではあるものの情報モラル教育に関心の無い方も多かったと思うが、最近のトラブル事例を聞いた事により身近な問題として捉える事ができたようだ。 ・「中学生・高校生のためのネット社会の歩き方」読本をすぐ使用できる教材のとして配布したが、好評であった。 ・参加者が当初の見込より大幅に増えたため、急遽、メイン会場の映像と音声を他の会場へ中継することで対処した。
高松市総合教育センター	榎本　　委員	・講演では、情報モラルに係る小中学生の現状と実態について、グラフや写真を活用したプレゼンを視聴することにより、受講者も危機感を感じながら、情報モラル教育の必要生を理解することができていた。また、ワークショップでは受講者が自由に「ネット社会の歩き方」を閲覧しながら教材研究することができ、授業実践に向けてのイメージをもつことができた。
メルパルク名古屋 (協力: 富士電機 IT ソリューション株式会社)	藤村　委員長	・最近の児童・生徒は、我々大人が想像できないようなスマートフォンや携帯電話の使い方をしている事がよくわかった。 ・「中学生・高校生のためのネット社会の歩き

		方」読本は、UAL METHOD(urgent action -adaptability-long span human education)：（緊急対策と応用力を組み合わせる事）で構成している事を紹介して頂き、すぐ使用できる教材のとして配布したが、好評であった。
鹿児島市立学習情報センター	西田　　委員	・鹿児島市は、文部科学省の教育の情報化に関する調査の中で、情報モラルなどを指導する能力が低く、必要性を感じる教員は多い。また、保護者との連携について認識の違いや子どもたちの問題行動への対応にずれがあり困っている教員も多い。 ・今回セミナーに参加した教員は、情報モラル指導のリーダーになると思われるが、各学校一人以上の指導できる教員を増やすため、来年度も引き続き計画していきたいと考える。
柏市立教育研究所	西田　　委員	・最新の児童・生徒のインターネット利用状況や問題点を知ることができた。 ・ワークショップ形式で授業内容を検討したことで、具体的な考え方と指導方法を理解することができた。
市川市教育センター	木村　　委員	・ワークショップで学習教材を活用した授業案を作成したことにより、理解が深まった。
佐賀県教育庁(一部)	三宅　　委員	・三宅先生の講義では、情報モラルに関する様々な課題をデータとともに示していただき、現在の状況や問題点について確認することができた。また、県内の高等学校で導入が始まった学習用ＰＣやタブレット端末などについて、先行的な情報モラルに関する問題事案などを示してしていただき、参考になった。
佐賀県教育庁(二部)	三宅　　委員	・教材に関して各学校では今後、授業や指導の際に使うことを考えている。 ・ワークショップでは、短時間ではあったが、有意義な情報交換や指導計画について研鑽が積まれる機会になった。
北薩教育事務所	三宅　　委員	・ネット上のトラブル事案の紹介及び具体的な対応を紹介していただき、学校における組織的な対応や保護者への啓発のあり方等について方向性が確認できた。 ・また、多くの啓発資料を配布して頂いたので今後の各種研修会で生かしていきたい。
和歌山県教育センター	石原　　委員	・ジオタグ等の個人情報、ＬＩＮＥ等のアプリによるいじめや乗っ取りに関して、児童・生徒の利用状況と利用にまつわる危険性についてよく理解できた。 ・情報モラルに関しては、ネガティブラーニングになりがちだが、情報社会の光と影を取り上げた教材を活用しての指導が必要なことがよくわかった。
函館市 　函館競輪場テレシアター	藤村　委員長	・パソコンやタブレットが無くても、スマーフォンがあれば学習教材を活用した授業展開ができることがわかった。

名古屋情報メディア専門学校 （協力：学校法人電子開発学園）	佐久間　委員	・今回のセミナーではＩＣＴ環境に応じた情報モラル教育が必要不可欠となっていることを踏まえ、実践的な教育や指導を行うための学習となりました。「いい勉強・情報交換の場になった」、「今回セミナーの発展版を希望」など参加された先生からも好評を得られました。
大阪情報専門学校 （協力：学校法人電子開発学園）	榎本　　委員	・ＰＣ・スマホなどの利用の仕方によるメリットとデメリットや、その問題の元となる原因と対応策を、実例をもとに説明。また、小・中・高といった対象別の教育ポイントなどを、最近利用の多いスマホを例にレクチャーするなど、学生指導に即役に立つ内容でした。 ・アンケートの結果などから見ても、参加者には満足のいく内容であったと考えます。講義時間としては、一部の先生はもっと話が聞きたいという声もありましたが、概ね妥当であると考えます。ただ、ワークショップは必要と感じました。
広島情報専門学校 （協力：学校法人電子開発学園）	佐久間　委員	・情報モラルの指導法について、理論的な内容から教材の使い方まで学ぶことができ、ワークショップでは、実践的な内容も体験でき、内容の充実した講習会であった。
北九州情報専門学校 （協力：学校法人電子開発学園）	三宅　　委員	・中学生の子供を持つ保護者および中学の教諭に対する講義であり、受講者には適した内容であった。特に参考になったことは、学生の指導方法や事件が発生した時の学校が関与する範囲についての説明であった。また、データを用いての説明だったため、大変説得力があった。
福岡情報専門学校 （協力：学校法人電子開発学園）	梶本　　委員	・参加された先生の大半が、SNS をあまり使用していなかったため、説明の途中で LINE の仕組みや子供たちが実際に使用しているサイトでの検索や作成など実際に操作することで、SNS というものの実態をより現実的に感じて頂けたようです。 ・アンケート結果も「プロフや LINE など具体的な内容を理解できてよかった」「今後の授業に活用していきたい」という意見がありました。 ・ただ、如何に生徒に理解させるか、規定の授業(大学受験など)の中に情報モラルの時間を盛り込めるのか？といった事で試行錯誤しているようです。情報モラル教育は、1 回やったら終わりではなく継続していくことが重要であることを再認識しました。

(3) 受講者へのアンケート

セミナー内容を改善するために受講者へ下記アンケートを実施した。

図表１２　受講者向けアンケートシート（おもて）

★マークのしかた

悪い　良い

「ネット社会の歩き方」講師育成セミナー　アンケート

「ネット社会の歩き方」講師育成セミナーを受講いただきありがとうございます。ご意見・ご感想を聞かせください。

選択式の回答は、該当箇所のマークを塗りつぶしてご回答ください。
: 空白マーク　: 正しいぬりつぶし　: 不十分なぬりつぶし

記述式の回答は、回答欄からはみ出さないように記入してください。
この用紙は機械で処理します。回答欄以外に書き込みをしたり、用紙を汚したり、折り目を付けたりしないように注意してください。

(1) 【択一選択設問】あなたの性別は？
男　女

(2) 【択一選択設問】あなたの年齢は？
20～29歳　30～39歳　40～49歳　50～59歳　60～69歳　70歳以上

(3) 【単一選択設問】あなたの所属についてお伺いします。以下の項目から、あなたの所属に合うものを１つ選んでください。（１つにマーク）
小学校　中学校　高等学校　特別支援学校　それ以外の学校
行政　その他

(4) 【単一選択設問】あなたの職名についてお伺いします。以下の項目から、あなたの職名に合うものを１つ選んでください。（１つにマーク）
校長　副校長　教頭
教諭　指導主事　その他

(5) 【複数選択設問】あなたの分掌分野についてお伺いします。あなたの分掌分野に合うものを選んでください。（複数回答可）
教科指導　生徒指導　教務　情報教育　研修
その他

(6) 【複数選択設問】あなたの担当教科についてお伺いします。あなたの担当教科に合うものを選んでください。（複数回答可）
小学校　情報　技術家庭　国語　社会　数学　理科　英語
音楽　美術　書道　保健体育　その他

(7) 【単一選択設問】これまで受講された研修についてお伺いします。過去に、今回のような情報モラル指導者を養成する研修会に参加したことがありますか。（１つにマーク）
ある　ない

(8) 【単一選択設問】これまでの情報モラル研修への関わり方についてお伺いします。過去に、情報モラルに関連したセミナー・研修の企画や講師を行ったことがありますか。（１つにマーク）
ある　ない

1 / 2
講師育成セミナーアンケート（2014年度）

図表１３　受講者向けアンケートシート（うら）

★マークのしかた

悪い　良い

(9)　【複数選択設問】受講動機についてお伺いします。本セミナーへの受講動機として該当する項目の番号を選んで下さい。（複数回答可）

- ( ) 情報教育の担当をしているため
- ( ) 情報モラル指導のレベルアップのため
- ( ) 上司から受講の指示、勧めがあったため
- ( ) その他

(10)【単一選択設問】セミナーの内容についてお伺いします。今後、みなさんが情報モラル研修会を実施する際に今回のセミナーが参考になると思うか、【参考度】をお答えください。（１つにマーク）

- ( ) 参考にならない
- ( ) あまり参考にならない
- ( ) やや参考になる
- ( ) 大変参考になる

(11)【自由記述設問】今回のセミナー内容に関してご意見・ご感想がございましたら、ご記入ください

(12)【単一選択設問】セミナーの教材についてお伺いします。今後、みなさんが情報モラル研修会を実施する際に今回紹介した教材が活用できると思うか【活用度】をお答えください。（１つにマーク）

- ( ) 活用できない
- ( ) あまり活用できない
- ( ) やや活用できる
- ( ) 大変活用できる

(13)【自由記述設問】今回ご紹介にした教材に関してご意見・ご感想がございましたら、ご記入ください

(14)【単一選択設問】今回のセミナーて得られた情報の展開についてお伺いします。本セミナー以降に、校内などでセミナー、研修会など開催する予定はありますか。あなたの考えに合うものを１つ選んでください。（１つにマーク）

- ( ) セミナー、研修会などの開催する
- ( ) 現時点で予定はないが、可能な規模・内容で計画したい
- ( ) セミナー、研修会など開催の予定はない
- ( ) その他

(15)【自由記述設問】開催を計画、予定されるセミナーや研修会はどのようなものでしょうか、ご記入ください

(16)【自由記述設問】最後に、全体を通してご意見・ご感想がございましたら、ご記入ください

アンケートへのご協力ありがとうございました。

2 / 2
教師育成セミナーアンケート（2014年度）

1)受講者プロフィール

セミナー受講者のプロフィールを図表 14 から 18 にまとめた。

・性別年代別受講者数

一部の地域では「生活指導」の先生を集めたこともあり、男性受講者の方が多い。年代別では 40 歳台次いで 30 歳台となっている。

図表１４　性別年代別受講者数（単一選択）

	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳代	無回答	合計
男性	68	99	105	79	7	0	0	358
	19.0%	27.7%	29.3%	22.1%	2.0%	0.0%	0.0%	
女性	28	39	45	32	0	0	0	144
	19.4%	27.1%	31.3%	22.2%	0.0%	0.0%	0.0%	
無回答	0	0	0	0	0		1	0
合計	96	138	150	111	7	0	1	503
	19.1%	27.4%	29.8%	22.1%	1.4%	0.0%	0.2%	

・学校種別受講者数

全国の学校種別の教員の人数が、小学校：中学校：高等学校＝１．７：１．０：１．０であることを鑑みると、やや高等学校の教員が少ない。

図表１５　学校種別受講者数（単一選択）

学校								合計
小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	その他	行政	その他	無回答	
203	129	103	21	15	22	8	2	503
40.4%	25.6%	20.5%	4.2%	3.0%	4.4%	1.6%	0.4%	

・役職別受講者数

一部の熱心な校長先生や教頭先生が受講されているが、教諭が圧倒的に多い。

図表１６　役職別受講者数（単一選択）

校長	副校長	教頭	教諭	指導主事	その他	無回答	合計
10	0	6	415	16	54	2	503
2.0%	0.0%	1.2%	82.5%	3.2%	10.7%	0.4%	

・分掌分野別受講者数

勤務校で情報教育を担当されている先生が多いが、次いで「生徒指導」担当の先生が多い。

図表１７　分掌分野別受講者数（複数選択）

教科指導	生徒指導	教務	情報教育	研修	その他	合計
195	109	76	198	62	84	724
26.9%	15.1%	10.5%	27.3%	8.6%	11.6%	

・担当教科別受講者数
担当教科別に特に偏りは無い。

図表１８　担当教科別受講者数（複数選択）

小学校	情報	技家	国語	社会	数学	理科
187	56	37	29	38	67	49
英語	音楽	美術	書道	保健体育	その他	合計
32	10	8	4	39	68	624

2)受講者のこれまでの情報モラル研修との関わり
セミナー受講者のこれまでの情報モラル研修との関わりを図表 19 から 21 にまとめた。

・過去の受講経験
過去に情報モラル研修を受講したことの無い先生の方が多かった。

図表１９　過去に、情報モラル指導者を養成する研修会に参加したことがあるか（単一選択）

ある	ない	合計
195	303	498
39.2%	60.8%	

・過去の講師経験
過去に情報モラル研修を企画したことが無い先生の方が多かった。

図表２０　過去に、情報モラルに関連したセミナー・研修の企画や講師を行ったことがあるか（単一選択）

ある	ない	合計
56	440	496
11.3%	88.7%	

・本セミナーの受講動機
「上司からの指示」の割合は少なくなってはいるが、積極的に受講されている先生は少ないと思われる。

図表２１　本セミナーの受講動機（単一選択）

１：情報教育の担当になっているため	184	32.1%
２：情報モラル指導のレベルアップのため	177	30.8%
３：上司からの指示があったため	139	24.2%
４：その他	74	12.9%
回答数	574	

3)本セミナーに対する評価

・本セミナーは、今後の情報モラル研修会実施上の参考になるか。
97% の受講者が有用と考えている。

図表２２　本セミナーの有用度（単一選択）

参考にならない　　<<<<<<　　参考になる			
1	2	3	4
10	6	94	377
2.1%	1.2%	19.3%	77.4%
		3or4 の回答比率	
		96.7%	

・本セミナーで利用した教材は、今後の情報モラル研修会に活用できるか。
98% の受講者が教材を活用できると考えている。

図表２３　本セミナー教材の有用度（単一選択）

活用できない　　<<<<<<　　活用できる			
1	2	3	4
3	5	153	325
0.6%	1.0%	31.5%	66.9%
		3or4 の回答比率	
		98.4%	

4)今後のセミナー開催予定

セミナーの開催を具体的に考えている先生が少ないことは今後の課題と考えている。

図表２４　今後のセミナー開催予定（単一選択）

１．セミナー、研修会などの開催する	37	7.7%
２．現時点で予定はないが、可能な規模・内容で計画したい	277	57.6%
３．セミナー、研修会など開催の予定はない	136	28.3%
４．その他	31	6.4%
回答数	481	

４．学習教材開発

(1) 学習教材開発

前回学習教材を開発したのは平成 23 年度であり、それ以降、スマートフォンの爆発的な広がりや、コミュニケーションサイトに関連するトラブルが頻発していることを受け、これらをテーマとする新教材を開発することとした。平成 24 年度に「中学生・高校生のための　ネット社会の歩き方」を冊子として開発していたが、好評を得ていたので、その際に取り上げたテーマも学習教材として追加することとした。

教材の開発に際しては、対策が必要なトラブル事例のピックアップ、主テーマの選定、シナリオの開発、詳細シナリオの開発、アニメーション用絵コンテの開発、アニメーションの開発、音声データの付加、という手順をとった。

図表２５　学習教材一覧

番号	担当	対象	タイトルと概要	声優	
1	榎本委員	小中高	◆ネットゲームの落とし穴 ・通常プレイは無料のネットゲームに没頭しているうちに、ゲームを有利に進めるための課金をしたところ、予想外の金額になり慌てた。 ・一回の課金金額は少額でも積み重なると高額になるので、課金の上限設定等を勧めている。	トシキ（男子中学生） 魔女キャラ 友達Ａ（男子中学生） 友達Ｂ（男子中学生） トシキ母 女性教諭（まとめ）	因幡　優子 伊藤あすか 榎　マリ子 北川ゆめ 宮内佐和子 筏井かなえ
2	高橋委員	中高	◆セキュリティのコツ ・パソコンやタブレット、スマホの画面ロック機能の活用の勧めと、ロック解除用の覚え易いが他人には見破られにくいパスワードの作り方を指導している。	レイナ（女子中学生） レイナ兄（男子高校生） 母 女性教諭（まとめ）	八劔すみれ 小倉　直寛 榎　マリ子 筏井かなえ
3	佐久間委員	小中高	◆読まれたのに返事が来ない・・・ ・メッセージのやりとりにおいて、返事が遅いとか無いとかが原因でいじめに進展する場合がある。 ・メッセージに対して決められた時間内に回答しなければならないというルールは無いということの周知と、困った時には保護者や先生に相談することを勧めている。	いずみ（女子中学生） 友達（アヤカ女子中学生） 女性教諭（まとめ）	伊藤かなこ 高橋　春香 筏井かなえ
4	三宅委員	中高	◆やめたいけど、やめられない・・・ ・四六時中メッセージのやりとりをしているとスマホ・ケータイに振り回されることになる。また、友達同士でスマホ・ケータイに縛り付けるようなルールは設けないことを勧めている。	アヤカ（女子中学生） アヤカ母 ユミ（女子中学生） エリ（女子中学生） 女性教諭（まとめ）	高橋　春香 宮内佐和子 伊藤かなこ 榎　マリ子 筏井かなえ

5	三宅委員	中高	◆面白半分の投稿で人生台無し！？ ・面白半分で投稿したことに起因して数年後に人生を棒に振ることもあると警告。 ・軽はずみな行為を戒め、良識ある行動を勧めている。	リョウタ（男子高校生）　入倉　敬介 友達（男子高校生）　新井　慶太 NetNews　（女性）　榎　マリ子 NetNews　（女性）　西澤　香奈 NetNews　（男性）　平林　正 NetNews　（男性）　横田　和輝 店長(20 代男性)　平林正 企業面接官(30 代男性)　小倉　直寛 男性教諭（まとめ）　合田慎二郎
6	石原委員	中高	◆あなた、本当は誰ですか？ ・ネットの匿名性を利用したメッセージのやりとりは何処までが事実かが解りにくい。 ・相手につけ込まれないように個人情報やプライベートな情報の交換には慎重な行動が要求される。	サキ（女子高校生）　西澤　香奈 アプリの評価　伊藤あすか タケル（男子高校生）　小倉　直寛 タケル兄（４０代男性）　平林　正
7	木村委員	小中	◆傷つくようなメッセージが友達から来たら ・例えば「いいよ」という言葉は、「褒め」の場面と「拒否」の場面で使用する。 ・発信者の思いと受信者の受け止め方に齟齬があるといじめ等に繋がる場合がある。特に人間関係ができていない中で短い言葉での会話ではこういうことが起き易い。	チヒロ（女子中学生１年）　吉田　幸代 女性教諭（まとめ）　筏井かなえ さゆみん　筏井かなえ のんちゃん　八釼すみれ
8	石原委員	小	◆なんて返事をしようかな ・コミュニティサイト等で見ず知らずの人に対してメッセージを発信する際は慎重な対応を勧めている。	リョウ（小４男子）　上田　那央 ショウタ（小２男子）　天野　未来 友達Ａ（小２男子）　宮内佐和子 友達Ｂ（小２男子）　北川　ゆめ Ａ戦士　新井　慶太 ショー戦士　天野　未来
9	榎本委員	小中高	◆写真の中に地図がある！？ ・ケータイやスマホの GPS 機能を使用していると撮った写真の中にジオタグが埋め込まれることがある。 ・見知らぬ人へのジオタグを埋め込んだ写真の公開は、居場所を伝えることなので止めた方がよい。	アキ（女子中学生）　高橋　春香 男性教諭（４０代男性）　新井　慶太 悪者（２０代男性）　合田慎二郎 男性教諭（まとめ）　合田慎二郎
１０	西田委員	小中高	◆ケータイゲームに夢中になると ・ゲームにはまり、授業中に居眠りする様子を見て、「どうしてこのようなことになったのだろうか」と問いかける。 ・ゲームを始める前に家庭のルールを作ることを勧めている。	ハルキ（小５男子）　上田　那央 ナツオ（２０代男性）　入倉　敬介 アキラ（男子高校生）　横田　和輝 ハルキ母　榎マリ子 女性教諭　北川　ゆめ 男性教諭（まとめ）　合田慎二郎

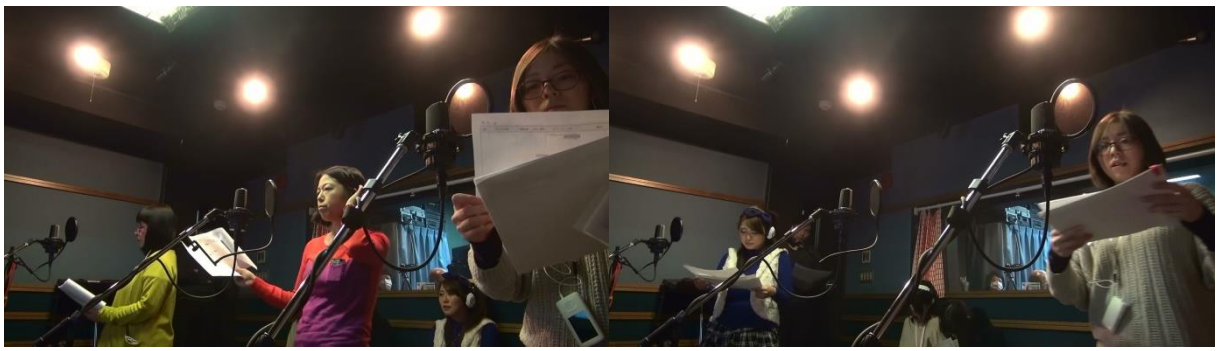
図表２６　学習教材開発担当者一覧

所属	役職及び氏名	役割
株式会社クレステック	スーパーバイザー　古川　功一	総括責任者
フリー	市田　晶子	シナリオライター
ＲＭＥ株式会社	柴田　勝俊	音声ディレクター

アッセンブラージュ株式会社	田口　義治	ミキサー
ＲＭＥ株式会社	天野　未来	声優
同上	新井　慶太	声優
同上	筏井かなえ	声優
同上	伊藤あすか	声優
同上	伊藤かなこ	声優
同上	因幡　優子	声優
同上	入倉　敬介	声優
同上	上田　那央	声優
同上	榎　マリ子	声優
同上	小倉　直寛	声優
同上	北川　ゆめ	声優
同上	合田慎二郎	声優
同上	高橋　春香	声優
同上	西澤　香奈	声優
同上	平林　正	声優
同上	宮内佐和子	声優
同上	八劔すみれ	声優
同上	横田　和輝	声優
同上	吉田　幸代	声優

図表２７　スタジオアッセンブラージュでの学習教材のシナリオ微調整の様子（平成２７年１月８日）

図表２８　スタジオアッセンブラージュでの学習教材への音入れの様子（平成２７年１月８日）



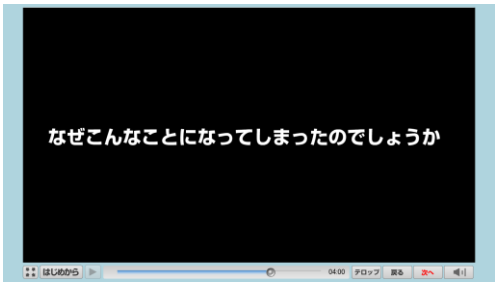
(2) 学習教材例

今回開発した教材は以下の特長を有している。

・当社団の WEB ページで直接利用できる。
・WEB ページからダウンロードして利用することも可能としている。
・いずれの教材も 4 分未満であり、小中高校の教員が授業で使い易くしている。
・いずれの教材も音声データが入っており、自学用にも使用できる。

図表２９　教材番号５１「ネットゲームの落とし穴」の流れ

場面	イメージ	概要
０１		・「通常プレイ」は無料のネットゲームに没頭しているうちに、ゲームを有利に進めるための課金をしたところ、予想外の金額になり慌てた。 ・一回の課金は少額でも積み重なると高額になるので、課金の上限設定を勧めている。
０２		・スマホでゲームを楽しんでいる　トシキ君。 ・新作ゲームの公開を喜び、早速ダウンロードしてゲームを始めた。 ・ゲームを進めるに従い、徐々にモンスターを倒せなくなってきた。
０３		・その時、ゲームキャラが登場し、ゲームの進め方やモンスターを倒すコツを教えてもらった。 ・特殊なアイテムが必要とのことで、手に入れるためには時間をかけてこつこつゲームを進めるか、もしくはゲームキャラから購入するとのこと。
０４		・「ゲームキャラから購入するということは本当のお金を使うってことなんだけど、３００円だからいいかっ」と、トシキ君は考え購入した。 ・その結果、特殊アイテムをゲットしモンスターを倒すことができた。
０５		・翌日学校で、モンスターを倒したことを友達に自慢した。

０６		・次の日、またモンスターを倒すのに困っているとゲームキャラが登場し、再度購入し、特殊アイテムをゲットしモンスターを倒した。 ・その次の日も．．．
０７		・そのまた次の日も困っているとゲームキャラが誘いをかけてくる。
０８		・．．．
０９		・翌月、高額な請求書が届いて、お母さんに怒られてしまった。
１０		・なぜ、こんなことになってしまったのだろうか、皆で話し合おう。

・この教材のように「こんなことをしてはいけないよ」と教えるのではなく、「なぜ、こんなことになってしまったのか皆で話し合おう」というオープンエンドの教材が多く、児童・生徒に少しでも考えさせる場面を提供することを狙っている。

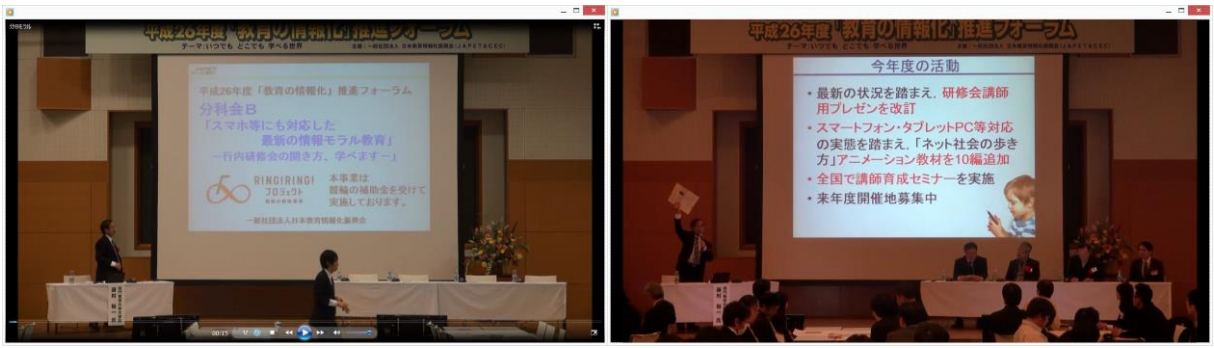
５．成果発表会

当事業の活動内容を広く広報するために、平成２６年度 JAPET&CEC 教育の情報化推進フォーラムにおいて「スマホにも対応した最新の情報モラル教育　～校内研修会の開き方、学べます～」と題して分科会 B を開催した。

分科会の概要は以下の通りである。

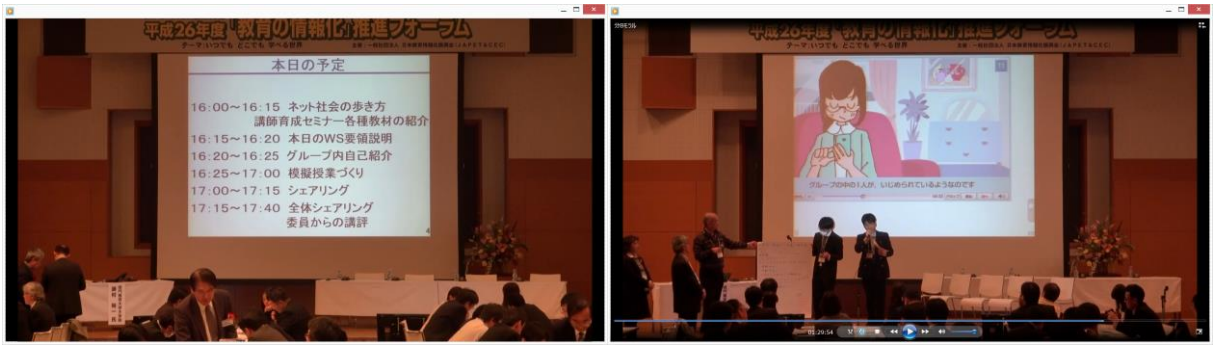
・開催日時　　平成 27 年 3 月 6 日　16 時～17 時 40 分
・国立オリンピック記念青少年総合センター　国際交流棟
・来場者数　　ワークショップ参加者　　50 名
　　ワークショップ非参加者　　40 名
・プログラム　JAPET&CEC が提供している学習教材の使い方の紹介
　　学習教材を使った授業設計
　　授業のポイントの発表

図表３０　成果発表会の様子　講義その１



図表３１　成果発表会の様子　講義その２

図表３２　成果発表会の様子　ワークショップ



６．まとめ

近年のＩＣＴ機器の進展は目覚ましく、個々のハードウェアやソフトウェアに対応した情報モラル教育は事実上不可能になっている。学校教育でよく言われる「流行と不易」を、教える側が良く考え取り組む必要がある。

ある教育委員会で開催した中学校の教員を対象としたセミナーの際に、スマートフォンを保有している教員は約三分の一であったことでもわかるように、明らかに生徒より教員の方がスマートフォンの保有率は低い。当然、多種多様なアプリケーションに対する認識も低い。このような状況において、いかに生徒を安全安心な方向へ指導していくかは並大抵ではできない。

ここにおいて、公益財団法人ＪＫＡの補助金を原資として、ＪＡＰＥＴ＆ＣＥＣが情報モラル指導の教材開発と教員向けセミナーを開催することは非常に社会的に価値があると考えている。文部科学省の学習指導要領に基づいた「不易」の部分に関する指導方法の研修と、マスコミへの掲載記事に基づいた「流行」の部分に関する最新の事故、事件、リスク回避方策の伝達は、日々児童・生徒と接している教員にとって指導時の参考になっている。

ＪＡＰＥＴ＆ＣＥＣでは、「不易」な面での道徳を中心とする「心を磨く」領域の教材提供に特に力を入れていきたい。一方で、「流行」の面では情報を中心とする「情報の知識」「情報の理解」領域の教材提供に力を入れていきたい。具体的には来年度も教員向けセミナーの開催と陳腐化（例えば、ガラケーや出会い系サイトを題材にした教材）した学習教材の更新を予定している。

最後に、少しでも多くの教員が情報モラル指導を実践できるよう、ＪＡＰＥＴ＆ＣＥＣおよび委員全員が啓蒙活動に邁進する所存である。

以　上

第２章
コミュニケーション力育成のための事業

１．事業の目的

インターネットは、社会生活の一部となり、買い物や予約申込み等は電話よりもむしろインターネットを利用して行い、インターネット無しでは考えられないというほど、社会生活に浸透している。また、スマートフォンがフィーチャーフォンを上回って普及する現状では、インターネットへの入り口となる端末は、パソコン、携帯電話からスマートフォン、タブレット端末、ゲーム機、音楽プレーヤーのように多様化すると同時に、いつでも、どこでも、誰でもインターネットに接続して、利用できるものとなっており、児童・生徒は保護者の目の届かないところで利用できるようになった。

このように身近になったインターネットであるが、その利用により手軽に多くの情報を入手したり、見知らぬ人々とコミュニケーションを取ったり、自宅での買い物も手軽にできるなど、様々なことが手軽にかつ安全安心にできるようになると同時に、もう一方では児童・生徒が SNS や無料ゲームなどのコミュニティサイトで犯罪などに巻き込まれる事例も発生している。

JAPET&CEC では、児童・生徒の安全安心を願い「教育現場の ICT 安全安心対策事業」を展開しており、この中の一つの事業として「コミュニケーション力育成のための事業」を実施している。

文部科学省の学習指導要領では「言語活動の充実」と記載されているものの、具体的な内容は現場の教員に任されている。我々は、全国の教員に対する実態調査から、言語活動のスキルレベルを協調的段階としての「対話」「交流」と、主張的段階としての「討論」「説得・納得」の４つの段階に分類すると共に児童の発達段階に応じた指導方法を整理した。

そして全国の教育委員会でセミナーを開催できるように、以下のような研修モジュールとしてまとめた。

A:理論概説
B:課題改善
C-1:パネル討論
C-2:ブレーンストーミング
C-3: ブレーンストーミング＋KJ 法
C-4:イメージマップ
C-5:バズセッション
C-6:ポスターセッション

研修会の開催に際しては、この研修モジュールを組み合わせて実施することとした。

また、研修内容は、昨年度実施した結果課題としてあがった、研修内容の授業へのさらなる定着である。

確実に学習活動に活かしていく、またはさらなる定着のために、一箇所について研修を二回実施した。

第一回目の研修で、コミュニケーションツールを活用したワークショップを体験し、第二回目の研修では、一回目の研修で習得したコミュニケーションツールを活用した授業提案をしてもらい、実際に実践授業を行うというものである。実践授業後、授業者と学校内の先生方で、授業検討会を開き、良かった点、課題となった点、またその改善方法を検討し合い、提案授業内容をさらにブラッシュアップしていくものである。

２．作業項目とスケジュール／作業体制

(1) 作業項目とスケジュール

作業項目とスケージュルは下記の通りである。

図表１　作業スケジュール

	平成２６年									平成２７年		
作業項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
委員会開催		▼① 17						▼② 14				▼③ 28
開催地公募	--▼											
テキスト改訂		▲---	---▼									
セミナー開催			▲----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	▼
学習教材開発		▲----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	▼
成果発表会												▼ 7

(2) 委員会の設置

本事業では有識者で構成する「コミュニケーション力育成検討委員会」を組織して作業に取り組んだ。全３回の委員会を開催し、作業スケジュールの策定、セミナー開催地の公募と採択、セミナー用テキストの改訂、セミナー開催時の講師、成果発表会での報告等、本事業の全体を管理した。

また、テキスト改訂の実作業、開催地の教育委員会との連絡、セミナー開催準備は事務局が担当した。

図表２　委員一覧

所属	役職及び氏名	
放送大学	教授	中川　一史
船橋市立塚田小学校	校長	秋元　大輔
鳥取県岩美町立岩美中学校	教諭	岩崎　有朋
船橋市立小栗原小学校	校長	久保　昌也
金沢星稜大学	教授	佐藤　幸江
柏市立柏第二小学校	教頭	佐和　伸明
大崎市立鬼首小学校	教頭	成瀬　啓
柏市立中原小学校	校長	西田　光昭
熊本県教育庁	指導主事	山本　朋弘
金沢星稜大学	教授	村井　万寿夫

図表３　事務局等の体制

所属	役職及び氏名		役割
一般社団法人日本教育情報化振興会	専務理事	鶴田　雅文	責任者
同上	事務局	藤本　康雄	総括
同上	普及促進部	渡邉　浩美	開催地との連絡窓口
株式会社フォーラム・Ａ企画	部長	矢田　智子	学習教材開発責任者

(3) 委員会開催

対面での委員会開催の他、メールによる検討・決議を行った。委員会の開催日、議題は下記の通りである。

図表４　委員会開催実績

開催回数	開催日	議題
第一回	26. 5.17	・年度スケジュールの確認 *WG1: 研修会の開催と実践授業の実施 *WG2: タブレットの活用の仕方を纏めた書籍の出版 *WG3: シンキングツールの浸透に向けたテキスト開発 ・セミナー開催地採択と担当委員の選定 ・テキスト改訂カ所の検討
第二回	26.11.14	・本年度作業の進捗確認
第三回	27. 3.28	・本年度作業のまとめと来年度に向けての改善事項の洗い出し

(4) 開催地公募

研修会の開催地は以下の要領で行った。

1)テーマ

「コミュニケーション力育成のポイント」

2)開催時期と時間

平成 26 年 6 月から平成 26 年 12 月の間の午後、最低 2 時間 30 分

3)対象受講者と会場あたりの定員

教職員　　約 30 名程度（目安）

4)開催会場

地方自治体等の無償で利用できる会場

5)セミナーの具体的な内容

ICT 社会におけるコミュニケーション力の育成検討委員会と貴教育委員会の協議で決定する

6)セミナーのプログラム（例）

◆同一地域での二回開催を基本とする◆

第１回目：コミュニケーション力を育成する授業とは

テーマ：コミュニケーション力の重要性

概　要：21 世紀型コミュニケーション力の概説
コミュニケーションスキルの分類
コミュニケーション力を育成するツールの紹介
コミュニケーションツールを使ったワークショップ

講　師：学識経験者

第２回目：実践授業

テーマ：第１回目のセミナーで習得したスキルを実際の授業で実践する

概　要：実践授業の実施
授業研究会の開催
（授業研究会の中でもコミュニケーションツールを活用する）

講　師：学識経験者

(5) セミナー用テキスト改訂

セミナー用テキストの中の誤字脱字を中心に改訂作業を行った。また、コミュニケーション力育成ツールの差し替えを行った。

３．セミナー開催

(1) セミナー開催

本事業で提供するセミナーは、全国の小中学校が掲げている研究テーマの一プログラムとして実施される場合が多い。この関係で、教員が比較的時間を確保し易い、夏休み或いは冬休み期間に開催が集中している。

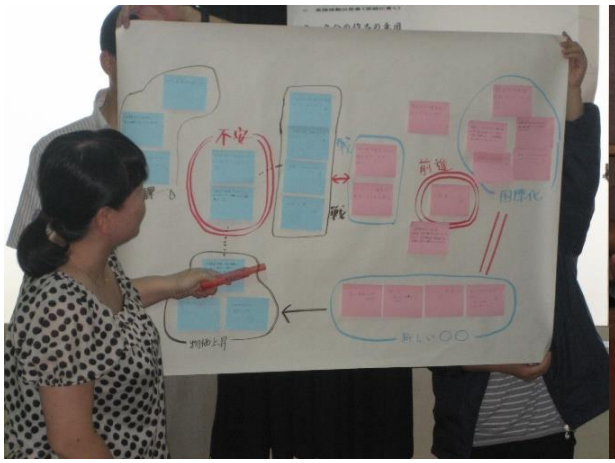
図表５　セミナー開催実績

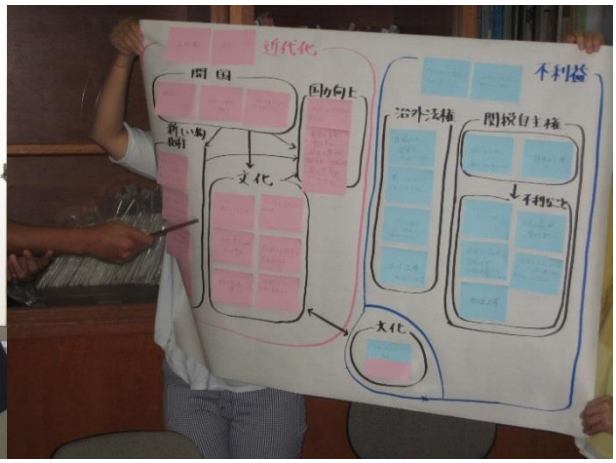
開催回数	開催日	開催場所	講師	人数
第　一回	26. 6.20	京都市立唐橋小学校(研究会)	岩崎　　委員	27 名
第　二回	26. 6.26	京都市立梅小路小学校(研究会)	西田　　委員	20 名
第　三回	26. 7.14	佐賀市立赤松小学校　(研究会)	中川　委員長 山本　　委員	30 名
第　四回	26. 7.15	熊本県高森町教育委員会(研究会)	中川　委員長	63 名
第　五回	26. 7.30	仙台市立西山小学校(研究会)	成瀬　委員長	15 名
第　六回	26. 7.30	鳥取県岩美町教育委員会(研究会)	西田　　委員	85 名
第　七回	26. 8. 7	浜松市教育研究会(研究会)	佐和　　委員	9 名
第　八回	26. 8.19	京都市立松ヶ崎小学校(研究会)	村井　　委員	26 名
第　九回	26. 8.20	鹿児島県長島町立城川内小学校(研究会)	佐藤　　委員	10 名
第　十回	26. 9. 2	横浜市立北山田小学校(研究会)	佐藤　　委員	30 名
第十一回	26. 9.18	京都市立唐橋小学校(授業実践)	岩崎　　委員	25 名
第十二回	26.11.10	横浜市立北山田小学校(授業実践)	佐藤　　委員	30 名
第十三回	26.12. 5	熊本県高森町教育委員会(授業実践)	中川　委員長	450 名
第十四回	26.12. 9	大崎市立鬼首小学校(研究会)	成瀬　　委員	80 名
第十五回	26.12. 9	京都市立梅小路小学校(授業実践)	西田　　委員	20 名
第十六回	26.12.11	佐賀市立赤松小学校(授業実践)	中川　委員長 山本　　委員	30 名
第十七回	26.12.11	鹿児島県長島町城川内小学校(授業実践)	佐藤　　委員	12 名
第十八回	26.12.16	仙台市立西山小学校(授業実践)	成瀬　　委員	15 名
第十九回	27. 2.20	京都市立松ヶ崎小学校(授業実践)	村井　　委員	25 名
合計				1002 名

図表６　鳥取県岩美町教育委員会での研究会風景（平成２６年７月３０日）

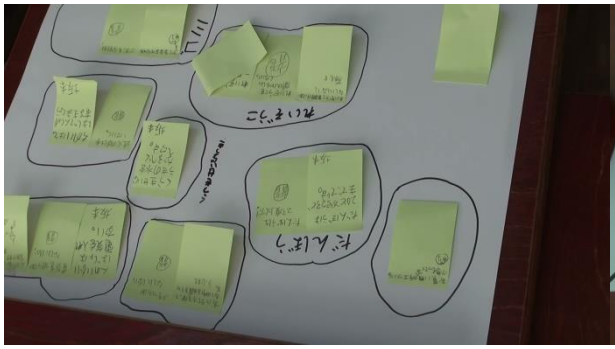
図表７　熊本県高森町教育委員会で研究会風景（平成２６年７月１５日）

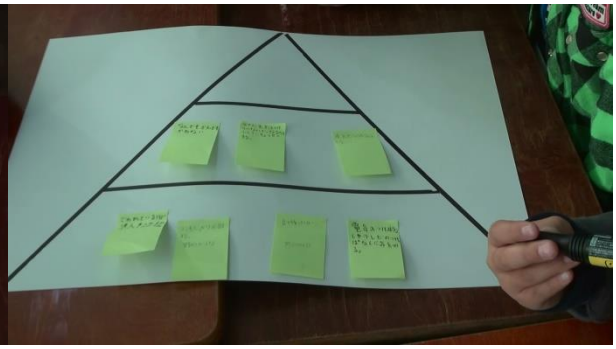
図表８　鹿児島県長島町立城川内小学校での研究会風景（平成２６年８月２０日）



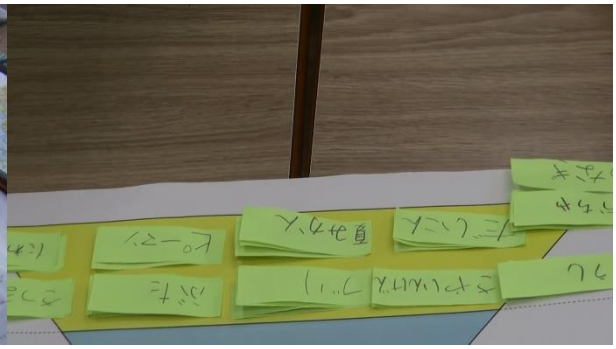


図表９　京都市立梅小路小学校での授業実践風景（平成２６年１２月９日）





図表１０　鹿児島県長島町立城川内小学校での授業実践風景（平成２６年１２月１１日）



(2) セミナー開催団体の所感

コミュニケーション力の育成研修の開催団体からは，研修開催後に実施報告書を提出してもらう。開催団体からの実施報告書（抜粋）を以下に示す。

① 京都市立唐橋小学校(研究会)

開催日時	平成 26 年 6 月 20 日(金)　　１５時００分 ～ １７時００分
開催場所	京都市立唐橋小学校会議室
参加者人数	２７名　内訳：指導主事　０　名（社会教育主事含む） 小学校教員　２７　名　特別支援学校教員　０　名 中学校教員　０　名　研究教諭・研究員　０　名 高等学校教員　０　名　他　０　名
研修の狙い	○２１世紀型のコミュニケーションとは何かを知る ○ＫＪ法をはじめとする思考ツールを体験し，実際の授業でどのように活用できるかを考える
考察	○本校は児童にコミュニケーション力をつけることを課題としており，今年度から，国語科を中心にどのようにしてコミュニケーション力を高めるかを研究することにした。その一環として，：「ＩＣＴ社会におけるコミュニケーション力の育成」研修を受講することを決めた。 ○付箋を使ったＫＪ法による討議は，従来から研究授業の事後研でおこなっており，本校の教員には比較的慣れた手法であった。しかし，この手法を授業に活かして行くことはなかった。（付箋を使うのは作文を書く際の書く内容を順序立てる際に使うことぐらいであった。）したがって，付箋を使って児童が思考を広げる，思考を深めるという活動をどのような場面で行えばよいかを考える機会となった。 ○特に，一斉授業を中心に行っていた本校の授業形態を，班単位・グループ単位にして活動をする方が，コミュニケーション力を高める際に有効であること，その際に思考ツールとしての付箋をもちいることが，コミュニケーション力を高めることにつながることが，理論的に理解できた点が良かった。 ○コミュニケーション力の能力表は授業を考える際の資料として活用できそうだとの実感を得た。しかし，現行の指導要領上には記載されていないため，授業者が授業を構築する際には両面を見る必要があることが課題であると考える。 ○本校はタブレット端末の活用をすすめているが，講師の先生もタブレット端末による指導をしておられ，その実践方法を紹介していただいたことが，タブレット端末の活用を促すことにつながった。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	○９月の研究授業に向けて，中学年を主体として，付箋を活用したモデル授業の考えた。 ○国語の研究では単元全体の構想を練る必要がある。単元を貫く言語活動において，協働で作品をつくることもある。その際に付箋をはじめとする思考ツールを活かせることはないかを考える機会となった。特に，様々な考えを出し合い検討することが必要な場面を意図的に作り出していくという点で本研究が活かされたと考えている。

② 京都市立唐橋小学校(実践授業)

開催日時	平成２６年９月１８日(木)　　１３時５０分～１７時００分
開催場所	京都市立唐橋小学校
参加者人数	２７名　内訳：指導主事　　名（社会教育主事含む） 小学校教員　２７名　特別支援学校教員　０　名 中学校教員　０名　研究教諭・研究員　０　名 高等学校教員　０名　他　０　名
研修の狙い	○１回目の研修で学んだKJ法をはじめとするコミュニケーション力を高める手法を授業の中で，どう具体的化していけばいいのかを考える。
考察	○付箋を利用して意見を述べ合う方法は,どの子も意見が言いやすく，全員参加の授業になりやすい。 ○間口を広くしていろいろな方向からの意見を求めたい場合にとくに有効である。一方で，拡散したものをいかに集約していくかが難しい。子どもの中からでてきた考えをどうしたいのかを指導者がはっきり意識する必要がある。 ○範読を聞かせる場合は，デジタル教科書を活用すると，教師が，個人指導にまわることができる。 ○ペア活動やグループ活動は，出力能力の個人差を埋めるのに有効である。関わる児童の人数が少なくなるので児童の苦手感が薄れ，自分の思いを表現しやすくなる。 ○思考の可視化が次なるステップとなる。マトリックスの利用も効果的だと思われる。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	○研修後，授業の中に付箋を活用したＫＪ法の手法を使うことが増えた。 たとえば，３年生の国語「学校行事を紹介しよう」の中で，「運動会と言えば・・」というふうにそれぞれの行事のイメージを付箋に書いて意見を述べ合い，分類して島を作った後で,優先順位をつけて,グループで発表したい内容を考えていくなどした。意見を普段出せない児童も意見を述べられるようになっていった。

③佐賀市立赤松小学校(研究会)

開催日時	平成２６年７月１４日(月)　１５時１５分～１６時４５分
開催場所	佐賀市立赤松小学校
参加者人数	３０名　内訳：指導主事　　名（社会教育主事含む） 小学校教員　３０　名　特別支援学校教員　　名 中学校教員　　名　研究教諭・研究員　　名 高等学校教員　　名　他　　名
研修の狙い	児童生徒のコミュニケーション力育成を校内研修のテーマの一つとしており、教職員の研修と授業研究と関連付けながら研修の充実を図る。
考察	・　本研修は、校内研修のひとつとして、児童のコミュニケーション力を育成する手法を学ぶ、というねらいのもとに、特にイメージマップの活用についての研修を行った。 １．　イメージマップの概要について知る ２．　「授業に活かすために（今後の授業で取り組めそうなこと）」として学年グループで話合う ３．　全体で話合ったことを分かち合う ４．　まとめ という流れで実施した。 概要では、中川先生、山本先生より、イメージマップとはどういうものか、どのような場面で活用できるか、具体的な手法などについてのお話をしていただいた。これまでに、総合的な学習や、社会などで、イメージを広げ、課題につなげるために、活用したことがある教員もいたが、理論的なことは学んでいなかったため、学年の系統性や、階層を意識した活用や、具体的な活用場面、手法について学んだことはなかったため、実際の授業の中でどのように取り入れていくのか、授業の具体的なイメージをもつことができた。 その後、これまでに取り組んだイメージマップの活用についての紹介と，今後、どのような活用ができそうか、小グループで、付箋を使ってのグループワークを行った。低・中・高学年グループごとに話合ったので、今後取り組む教科や単元が明確であり、どの単元のどのような場面で取り入れられそうか、具体的な話題で交流することができた。学年の発達段階に応じて、階層を工夫したり、中心語句を何にするかなどの話題にもふれ、議論を深めることができた。グループで出た話題を全体で共有したことで、更に活用イメージが広がった。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	実際にイメージマップを取り入れた授業実践を行った。 ・社会や理科の導入場面 ・社会での学習前、学習後に実施 ・総合的な学習で個人テーマを決める際にイメージマップを活用して多様な視点を出し合い、焦点化していった。 ・生活科の秋みつけ、冬みつけ、町探検、などの単元でイメージマップを取り入れた。 ・国語「はつ明じむしょ」で、道具についてのイメージを広げる際に活用した。 ・国語の作文指導でイメージを広げる際に活用した。

④　佐賀市立赤松小学校(実践授業)

開催日時	平成２６年１２月１１日(木)　１４時０５分～１６時４０分
開催場所	佐賀市立赤松小学校
参加者人数	３０名　内訳：指導主事　名（社会教育主事含む） 小学校教員　３０　名　特別支援学校教員　名 中学校教員　名　研究教諭・研究員　名 高等学校教員　名　他　名
研修の狙い	児童生徒のコミュニケーション力育成を校内研修のテーマの一つとしており、教職員の研修と授業研究と関連付けながら研修の充実を図る。
考察	・　本研修は、校内研修のひとつとして、児童のコミュニケーション力を育成する手法を授業に活かす、というねらいのもとに、前回学んだイメージマップを取り入れた授業研究を行った。 １．　研究授業 ２．　授業についての意見交換 ３．　指導・助言　という流れで実施した。 研究授業では、6 年生でイメージマップを取り入れた社会科の授業を実施した。明治時代以降、江戸時代の内容、知識を生かしながらキーワードを使ってイメージマップを書かせ、そこから「2020 年の東京オリンピックをどのようなオリンピックにすべきか」というテーマでの討論を仕組んだ。これまでの歴史の学習や現在の日本が抱えている課題などをもとに、どのようなオリンピックにすべきかという自分なりの意見をもたせ、根拠となる資料をもとに、討論するものである。自分が一番取り上げたいところをイメージマップをもとに課題として取り上げ、調べていった。本時では、それぞれの立場から根拠となる資料を提示しながら、自分の意見を述べる姿が見られた。様々な意見を聞いた後、印象に残ったことをイメージマップに残し、それをもとに最終的な自分の意見を書かせた。最終的な観点が明確ではなかったために、子どもたちはどの意見もいいという方に流れてしまった。どのような観点で討論をさせるかをしっかり考えておく必要があった。 授業研究会では、イメージマップの活用効果のみならず、討論型授業での子ども同士のからみ、高め方なども研究会の話題になった。イメージマップの活用では、子どもたちの意識が違う方向に広がらないようにどうすればよいか、知識の羅列になるのではないか、という意見もあった。今回は子どもたちの意識が広がりすぎないように、社会科で学習した内容から出ないよう指導をしていた。教科として行う時に、どの程度制限して、どの程度自由度を持たせるかは難しいところである。子どもたちの実態と教師のねらいによっても変わってくるものだと考える。 講師の先生より、社会科の授業として、教師がどのような論点で討論をさせるのかをしっかりもっておくこと、個人思考から集団思考へつなぐ時の練り上げの観点を明確にすべきであること、イメージマップの活用として、階層や関係性の検討、ジグソー学習についても指導・助言していただき議論を深める事ができた。
研修開催後についてのアクション	研修会から間もないため、授業でのアクションはまだできていないが、イメージマップの活用や、話し合いの際の論点、話し合う観点など、学んだことを今後の授業に活かし、子どもたちの 21 世紀型コミュニケーション力を育んでいきたい。

⑤　京都市立松ヶ崎小学校(研究会)

開催日時	平成２６年８月１９日(火)　　９時　００分 ～１２時　００分
開催場所	京都市立松ヶ崎小学校　ふれあいサロン
参加者人数	１６名　　内訳：指導主事　　名（社会教育主事含む） 小学校教員　１４名　　特別支援学校教員　　２名 中学校教員　　名　　研究教諭・研究員　　名 高等学校教員　　名　　他　　名
研修の狙い	「ＩＣＴ社会におけるコミュニケーション力の育成」研修～「コミュニケーションツールを活用したワークショップ」～ 上記のテーマに沿って，教員が参加体験型の研修を受けることを通し，明日からの学級の教科指導等に生かせるようにする。
考察	はじめの４０分は，理論解説。「ＩＣＴ社会におけるコミュニケーション力の育成」研修テキストに沿って学習した。このテキストには，「２１世紀型コミュニケーション力」が系統的に示されており，子どもにつけていく力がよく分かった。また，実際の授業場面として，２学級〈２年生・５年生）の授業風景を視聴できたことは，具体的に①対話②交流，③討論④説得・納得のステージを深く理解することにつながった。また，子どもたち自身が授業をつくっていくスタイルが大切であることにも気づくことができた。本校は，若手教員も多い。このような実際の授業を視聴することができ，今後の授業改善の参考になったことであろう。 次に，参加体験として，テキストにある「Ｃ－３：ブレーンストーミング・ＫＪ法モジュール」を１時間ほど体験した。本校では，「２１世紀型ＩＣＴ教育の創造モデル事業調査研究」と京都市教育委員会から指定を受けて研究を進めている。そこで，「iPad を活用した・・・」と統一し，低学年は「iPad を活用した学習の方法」，中学年は「iPad を活用した言語活動の方法」，高学年は「iPad を活用した総合的な学習の時間の進め方」，育成学級は「iPad を活用した学習の方法」と，テーマを決めて話し合った。じっくりと時間をかけてブレーンストーミングをしたことで，いろいろな考えを出し合うことができた。夏休み明けからの授業に役立つ内容も考えられたようだ。この方法については，校内授業研究の授業後の研修会において，常に使用している。しかし，そこでは限られた時間である。今回のようにじっくりと時間をかけて，個々の考えをお互いに聞くことができたこと，そして整理の仕方を詳細に教えていただいたことは，今後の研究に役立つことであろう。また，この方法は，人の意見をじっくりと聴き，尊重することが根底にあることも教えていただいた。まさしく人を大切にする教育方法である。授業の中で自信をもって指導していきたい。 研修のまとめとして，学びや感想を参加者全員がまとめた。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	本校は，１２月５日（金）に上記の指定を受け，「自分のおもいをもち，互いに学び合い高め合う子ー体験・言語活動の充実を重視した環境教育の学習を通してー」を研究テーマに掲げ，研究発表会を行う。 当日の授業においては，今回の研修を生かし，子どもの交流（コミュニケーション）により，個々の課題の追究が深まるようにしていく。また，授業研究会後の話し合いでは，参加者（参加教員）と，ＫＪ法による話し合いをもち，参加型の研究会にしていく予定である。 ４年生においては，iPad を活用し，子どもの課題追究が深まるように，今回の学習方法も取り入れながら，授業を進めていく予定である。研究発表会当日の事前授業として，１１月下旬頃に授業を公開する。 また，校内研究だけにかかわらず，日々の授業においても，今回の学びを生かし，授業を組み立てていく。

⑥　京都市立松ヶ崎小学校(実践授業)

開催日時	平成２７年２月２０日(金)　　１４時５０分 ～ １７時００分
開催場所	京都市立松ヶ崎小学校　ランチルーム（４年１組授業）　　ふれあいサロン（事後研究会）
参加者人数	１４名　　内訳：指導主事　　名（社会教育主事含む） 小学校教員　１４名　　特別支援学校教員　　名 中学校教員　　名　　研究教諭・研究員　　名 高等学校教員　　名　　他　　名
研修の狙い	「ＩＣＴ社会におけるコミュニケーション力の育成」 子どもたちのコミュニケーション力を高めるための取組を考える ～夏季研修会で学んだことを生かして～
考察	夏季研修会で学んだＫＪ法を，授業の中に取り入れて実践をおこなってきた。今回は，ＫＪ法を子どもたちがどのように身に付けたのか，そして，今後のコミュニケーション力を高めるためには，どのような取組が有効なのかについて，研修会をもち，話し合った。 授業は，４年１組による，学級活動の時間（「家族のみなさんに思いをこめて歌をおくろう」ー家族のみなさんに感謝の気持ちを伝えるために，歌詞の意味や曲想を考え，表現を工夫し，思いや意図をもって歌う）。　iPad で子どもたちの歌の動画を録画，その動画を見て，工夫するところをＫＪ法によりグループで話し合う，そして，その結果をグループの代表が前に出て発表するという授業の流れ。 授業後は，研究協議会。教員から出た意見は以下である。 ・iPad を使用したことで，歌ってすぐにその映像を見て，工夫点を気付けることがよかった。 ・ＫＪ法により，グループでよく話し合えている。出た意見を話し合い，まとめられているのもよい。 ・グループでのコミュニケーションはよかったが，聞いている側の反応があればさらによかった。付箋が小さく見えにくかったので，拡大などできればよい。 ・各グループのまとめのおもいをフラッシュカードなどに書いて提示すれば，全体として，意識して練習できたのではないか。 金沢星稜大学　村井万寿夫教授からの指導は以下である。 ・iPad を学習道具として子どもたちが使っていく機会は，今後ますます増えていく。チームプレーやマット運動，音楽で歌唱後に見返すなど活用されることが増え，効果を挙げている。 ・学級活動は，子どもたちがクラスをよりよくするために，自主的・自治的に行う活動であり，教師がおもいをもっていても，子どもがちがうおもいをもっていれば，それによりそっていくことが大切。 ・机の上に置いた付箋をみんなで見回る時間があってもよかった。そのために，発表の時間のスリム化も大事。 ・聞き手用の付箋メモなど，聞き手側の工夫が必要。子どもたちは，メモなしで話し合ったことを発表できる力が育っている。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	○iPad の活用 授業の中で活用をしているが，今回の研修で，さらに活用の幅が広がった。今後は，ツールとして，どのような活用方法があるか，さらに探っていく必要がある。 ○コミュニケーション力の向上 ＫＪ法については，授業の中で活用することができ，子どもたちも身に付けた。しかし，話し合い，その内容を深めていくことについては，課題が残る。指導者側の授業力をつけることはもちろん，常にコミュニケーション力の向上をめざして，すべての教科等において意識してとりくんでいきたい。来年度は，研究教科の中に，コミュニケーション力の育成を強く押し出し，研究を深めていく。

⑦　仙台市立西山小学校(研究会)

開催日時	平成２６年７月３０日(水)　１３：００～１５：００
開催場所	仙台市立西山小学校　５年１組　音楽室
参加者人数	名　内訳：指導主事　名（社会教育主事含む） 小学校教員　１２名　特別支援学校教員　名 中学校教員　名　研究教諭・研究員　名 高等学校教員　名　他　名
研修の狙い	２１世紀型コミュニーケーション力に関する研修を通して，「自分の考えを持ち，伝え合うことができる西山の子どもの育成」という本校の校内研究に生かす。
考察	１．成瀬教頭先生から，２１世紀型コミュニーケーション力についての講話をいただいたことで，本校が目指すべきコミュニケーション力についての研修を深めることができた。　２．「本校の児童につけたい力をどのような場面で指導するか」について３つのグループでワークショップ形式で話し合い，互いに発表し合ったことで，すぐに指導に生かせるコミュニケーション力育成のヒントを共有することができた。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	朝の会や帰りの会・異学年交流・あいさつ運動等で，児童が相手を意識して伝えるべきことをしっかり伝えることができるよう指導することができた。

⑧　仙台市立西山小学校(実践授業)

開催日時	平成２６年１２月１６日(火)　１４：１５～１６：５５
開催場所	仙台市立西山小学校　５年１組　視聴覚室
参加者人数	名　内訳：指導主事　名（社会教育主事含む） 小学校教員　１４名　特別支援学校教員　名 中学校教員　名　研究教諭・研究員　名 高等学校教員　名　他　名
研修の狙い	２１世紀型コミュニーケーション力に関する研修を通して，「自分の考えを持ち，伝え合うことができる西山の子どもの育成」という本校の校内研究に生かす。
考察	１．５年１組　渡邊教諭の提案授業「社会：貿易ゲームを通して，日本の貿易の特色をまとめよう」の検討を通して，貿易ゲームという活動の可能性と課題を共有することができた。（意欲的に交流することができる活動である。ルールは簡単なものが好ましく，作戦タイムを有効に使いたい。） ２．成瀬教頭先生の「すぐに授業に生かせる ICT の活用」についての講話を通して，「課題を確実に把握し，見通しを持たせる活用・表現や思考を支援する活用・思考を可視化し，深化する活用」の例を知ることができ，児童のコミュニーケーション力を育むために ICT をどう生かすかを学ぶことができた。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	成瀬教頭先生からいただいたプレゼンデータを職員全体で共有し，ICT を活用できるようにした。ICT が必要と思われるときに必要なだけ，板書と併用し，授業の効率を上げるときに，積極的に活用していくことを確認した。

⑨　長島町立城川内小学校　（研究会）

開催日時	平成２６年８月２０日(水)　１０時００分 ～ １２時００分
開催場所	城川内小学校　パソコン室
参加者人数	９名　　内訳：指導主事　　名（社会教育主事含む） 小学校教員　９　名　　特別支援学校教員　　名 中学校教員　　名　　研究教諭・研究員　　名 高等学校教員　　名　　他　　名
研修の狙い	４年生の社会科の研究授業を通して,思考ツールを活用した話し合い活動の進め方や表現方法について研修する。
考察	思考ツールとして，ブレーンストーミング法とＫＪ法を学んだ。 ブレーンストーミングの４原則として，①量にこだわる。②批判をしない。③独創性を歓迎する。④融合させて改良する。という決まりがあった。このような原則によって，お互いの意見が尊重され，参加した全員が満足感を得ると感じた。 また，ブレーンストーミングを進めるにあたって，１回の発表でアイディア１つ②演説禁止などの約束があることで，一人の意見に時間を取りすぎることがなく，全員の意見を採り上げることができると感じた。 ＫＪ法の研修においては,それぞれの意見を大切にしていきながらグルーピングすることにより，大事なことを明確にしていけるよさがあると感じた。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	社会科学習において,自分たちの見つけたものを１枚の付箋紙に１つずつ書くように指導した。 授業研究会において，少人数グループを構成することで，一人一人の意見を取り上げやすくなった。出された意見をお互い尊重しながら，小グループ→全体で意見をまとめ，作り上げると言うことを体感することができた。個々が考えたことを意見として出しやすくなったため，話し合いが活発になった。

⑩　長島町立城川内小学校　（実践授業）

開催日時	平成２６年１２月１１日(木)　１４時１５分 ～ １６時４５分
開催場所	城川内小学校　４年教室
参加者人数	１５名　　内訳：指導主事　　名（社会教育主事含む） 小学校教員　１５名　　特別支援学校教員　　名 中学校教員　　名　　研究教諭・研究員　　名 高等学校教員　　名　　他　　名
研修の狙い	４年生の社会科の研究授業を通して，本校の研究テーマ「思考し，判断したことを表現する力を育てる社会科学習指導」のありかたについて研修する。 また,参加者の意見をより多く取り入れることのできる授業研究のあり方について研修する。
考察	《研究授業について》 ４年生の研究授業では，上記の研究テーマのもと，視点１「資料活用を通して思考力・判断力を高める手立て」として，資料から学習課題を解決する根拠を導き出す活動を行った。また，視点２「多様な表現活動を通して表現力を高める手立て」として，ピラミッドチャートを用いて，たくさんの物を１つに集約する活動を取り入れたり，集約する活動をグループで行う中で，自分の意見を述べる活動を取り入れた。 子どもたちはとても意欲的に学習に取り組み，学習課題「鹿児島県の盛んな産業」が何であるか見つけることができた。 《授業研究について》 研究授業を参観しながら，視点に関する成果と課題を付箋紙に書いてもらい，ワークショップ型の授業研究の中で，検討する形を取った。 話し合いの進め方は次の通りである。 １　黄色付箋紙に記録した成果を出し合う。 ２　出された成果の中で最もよい内容を一つ選び，黄色の発表用紙に記録する。 ３　桃色付箋紙に記録した課題を出し合う。 ４　課題の中で，改善策を話し合った方がよいと思う内容を一つ選び，桃色の発表用紙に記録する。 ５　改善策を話し合い，水色の発表用紙に記録する。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	「ＩＣＴ社会におけるコミュニケーション力の育成」の中にたくさん示されている思考ツールをもっと，学習や研修の中に取り入れ，何度も体験しながら，教師も子どもも自分の意見を積極的に発言できるようにしていきたい。 また，相互に意見交換する中で，他者の意見を聞く力，自分の意見と比べる力，よりよい方策を考える力を身に付けていきたい。

⑪　熊本県高森町４校合同(研究会)

開催日時	平成２６年１２月５日(金)　１４時３０分 ～ １６時１５分
開催場所	熊本県　高森町立高森中学校
参加者人数	４５０名　　内訳：指導主事　　名（社会教育主事含む） 小学校教員　１２０名　　特別支援学校教員　　名 中学校教員　１００名　　研究教諭・研究員　　名 高等学校教員　　名　　他　　２３０名
研修の狙い	町の研究テーマである 『児童生徒の思考力・表現力の育成を図る学習指導の工夫・改善 ～２１世紀にふさわしい ICT 環境を生かした学び合い高め合う授業づくりを通して～』 達成するための手段として、シンキングツールの活用をねらった。
考察	前回の７月の研修会では、参加した町の教員がブレーンストーミングを体験し、その方法や有用性について学んでいる。その後も、それぞれの学校での校内研修でブレーンストーミングを中心としたシンキングツールの活用について研修を行っている。また、学校によっては授業の中で、生徒にブレーンストーミングやポスター発表を行わせることがあった。その度に、児童生徒にシンキングツールの活用方法を身につけることができた。 また、授業におけるＩＣＴ機器の使い方に関するアドバイスを、山本、中川両先生から教えていただいたので、効果的な活用をすることができるようになった。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	研修会を終えて、シンキングツールとしてブレーンストーミングとＫＪ法を授業に活用する教師が増えた。また、それだけでなく、『「ＩＣＴ社会におけるコミュニケ―ション力の育成」研修テキスト』を活用する教師も増えたため、校内研修の計画を変更し、ブレーンストーミング+ＫＪ法やパネル討論の研修を追加して研修する学校もあった。

⑫　浜松市教育研究会情報教育部（研究会）

開催日時	平成 26 年 8 月 7 日(木)　午前９時００分 ～午後１２時００分
開催場所	浜松市教育会館
参加者人数	８名　　内訳：指導主事　　名（社会教育主事含む） 小学校教員　８名　特別支援学校教員　　名 中学校教員　　名　研究教諭・研究員　　名 高等学校教員　　名　他　　名
研修の狙い	浜松市情報教育研究部では、情報活用能力の育成と２１世紀型スキルの育成を目指し、授業研究や講演などをこれまでに行ってきた。その中で、グループでの協働学習が大切であることを見出し、そのためには関わりあうことが大切であると位置付けた。そこで、各校の情報主任が、本研修を通して、他とのコミュニケーション力の育成の理論と手立てを理解し、各校で授業実践が行えることをねらいとした。
考察	開催日時が夏期休業中であり、他の研修会と日程が重なったことがあり、参加人数が限定されてしまったが、参加者は自校に持ち帰り、授業実践をしようととても意欲的に、どの参加者も参加をしていた。 前半は、佐和先生より「２１世紀型コミュニケーション能力」について、実践を交えながら具体的に、理論を学んだ。特に、ただ話し合うのではなく、そこには段階があることがわかった。単元、１時間の授業で子供たちに何を求めるのかしっかりと計画を立てた上で、焦点を絞って手立てを打つ必要があることがわかった。KJ 法については、本研究会でも授業研究の事後協議において、活用をしており、授業でも実践されている方が多い。本研究を通して、身につけさせたい力のレベル、そのための手立てを知ることができ、実践と理論ろが結びつけることができた。 後半は、理論をもとにして、実際に体験しながら、「２１世紀型コミュニケーション力」の育成のポイントを学んだ。どこで子供はつまづき、どんな手立てをしたら、子供たちにつけたい力を身につけるさせることができるのか学ぶことができた。 理論と具体的な実践が結びつき、とてもいい研修の場となった。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	研究部会の中で、授業研究を行う中で、どこが「２１コミュニケーション能力」なのか、授業者にも理解してもらい、そこに至るまでの授業計画、一般参加者の方に伝えることが可能であった。

⑬　大崎市立鬼首小学校(研究会)

開催日時	平成２６年１２月９日(火)　　１０時３０分 ～１６時００分
開催場所	大崎市立鬼首小学校
参加者人数	８０名　　内訳：指導主事　　３名（社会教育主事含む） 小学校教員　３４名　特別支援学校教員　０名 中学校教員　４名　研究教諭・研究員　０名 高等学校教員　０名　他　３９名
研修の狙い	小規模小人数・へき地分校の子どもたちに思考力・判断力・表現力を付ける
考察	１．研修の概要 （１）１０：３０～１１：１５　公開授業　３・４年生複式　算数，５・６年生複式算数 （２）１２：４５～１４：４５　コミュニケーション力育成ワークショップ ①講話：２１世紀型コミュニケーション力とは ②ワークショップ：指導案改善モジュール活用 ・ブレーンストーミング＆ＫＪ法及びポスターセッションの解説 ・本日の授業についての検討を兼ねて，児童・生徒に「２１世紀型コミュニケーション力」を付けるための授業作りワークショップを行った。 （３）１５：００～１６：００　講演会 演題：「小規模少人数・複式学級の子どもたちに力をつける」～思考力・表現力の育成と ICT～ 講師：放送大学　教授　中川一史先生 ２．２１世紀型コミュニケーション力育成ワークショップについて （1)ブレーンストーミング＆ＫＪ法により,本時の授業について改善点をまとめる。 ・授業中及び休憩時間に記入していた付箋をもとに，ＷＳを行うことで，初めから視点を明確にして話し合うことができた。 ・グループ全員で課題を明確にすると共に，改善点を作り上げることができた。 （２）まとめた改善点をポスターに表現し，グループ毎に発表し合う。 ・①児童につけたい力，②本時の授業の課題，③改善案，④期待される児童，の４つの視点でポスターにまとめた。 ・ポスターセッションでは，様々な視点での改善案が出され，授業者にとっても参加者にとっても，次の授業につながるものとなった。 ３．研修全体を通して （１）児童の力について ・自分の意見を持ち，伝えようとする姿が見られるようになった。 ・自分の意見をできるだけ分かりやすく伝えようとする意欲が見られるようになった。 ・友だちの考えを自分の考えてと比較しながら聞くことができるようになってきた。 （２）教師の力について ・児童同士が意見を伝え合う場を意図的に作ろうとする意欲が見られるようになった。 ・間接指導における児童同士の話し合いを成り立たせるために，課題の与え方が最も大切であることを確認した。

研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	○司会者から，参加者に対して，児童に２１世紀型コミュニケーション力を付けるためにも，①教科の授業の中で行ってみることと，②教員研修の中で活用してほしいと伝えた。 ○鬼首小では，今回の研究会で学んだことを生かした授業を全員が行った。 ・３・４年生社会科の授業における，イメージマップを活用した実践 ・５・６年生の社会科の授業における，ポスターセッションを活用した実践 ・「生活科・総合的な学習の時間学習発表会」におけるグループでのプレゼンテーションの実践　等々 ○次年度の校内研究の中心的なテーマに「伝え合う力」を位置づけ，更に児童の伝え合う力をつけるべく研究に取り組んでいく。

⑭　京都市立梅小路小学校(研究会)

開催日時	平成　２６年　６月２６日(木)　　１５時　２０分 ～　１７時　００分
開催場所	京都市立梅小路小学校　会議室
参加者人数	２５名　内訳：指導主事　　名（社会教育主事含む） 小学校教員　２５名　特別支援学校教員　　名 中学校教員　　名　研究教諭・研究員　　名 高等学校教員　　名　他 名
研修の狙い	「『正しく言葉をつかい学び合える子』とは，どのようなことか」というテーマで，概要解説をきいた上で，ブレーンストーミング，ＫＪ法のワークショップ形式の研修を行い，子どものコミュニケーション能力を育成する授業構築につなげていく。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	日常の授業においてグループ学習を取り入れ，ブレーンストーミング，ＫＪ法，他に付箋紙を使った，思考の整理，コミュニケーションを取り入れるようにした。校内授業研究会において，同様の形式の授業を取り上げることにより，グループでのコミュニケーション，全体でのコミュニケーションについて議論した。

⑮　京都市立梅小路小学校(実践授業)

開催日時	平成　２６年１２月９日(火)　　１４時１５分 ～ １７時００分
開催場所	京都市立梅小路小学校　４年１組 教室　　会議室
参加者人数	２５名　内訳：指導主事　　名（社会教育主事含む） 小学校教員　２５名　　特別支援学校教員　　名 中学校教員　　名　　研究教諭・研究員　　名 高等学校教員　　名　　他　　名
研修の狙い	研修参加者で，ブレーンストーミング，ＫＪ法，ピラミッドチャートをもちいた授業を参観し，「コミュニケーションツール（KJ 法，ピラミッドチャート）を使い話し合うことが，子どもの思考を促しそれ　ぞれの考えを深めたり広げたりすることにつながっていたか。」「グループで話し合い目標を１つに決める活動が，目標達成に向けた意欲につながっていたか」という視点で授業内容について議論し，指導助言を受ける。本研修を，コミュニケーション能力を育む視点を取り入れた授業実践につなげるようにする。
考察	思考・コミュニケーションツールを用いた実際の授業を参観することにより，子ども達の反応を観察することができ，その効果・課題について考察することができた。特に，子ども達に話し合わせるテーマの設定については，今回の授業においては適切であったかは疑問であり，子ども達のコミュニケーションを促す際の留意点について議論することができた。ＫＪ法，ピラミッドチャートの一定の効果については，見ることができ，生かすことができそうな授業内容や授業のねらいについても議論することができた。２１世紀型スキルでうちだされている，グローバル社会を生き抜くために求められる，問題解決力，コミュニケーション力，コラボレーション力，情報リテラシーなど，次世代を担う子ども達につけなければならない能力を今後も指導者が意識しながらつけていきたい。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	グループ学習・話し合い活動の設定のしかたや，テーマ，話し合う視点などについて，よく吟味した上で日常の授業にコミュニケーションツールを取り入れるようにした。また，研究授業にも取り入れた。また，様々な思考ツール・コミュニケーションツールについて，日常の授業の中で試行錯誤をし，子ども達のコミュニケーション能力を育成することのできる学習活動を模索するようにした。

４．学習教材開発

過去、平成２２年度と平成２３年度にコミュニケーション力を育成するための授業例を中心としてまとめた教材を開発した。今回はこれらの発展形として、授業の中でタブレットパソコンをいかに活用するかを加えた教材を開発した。

図表 xx　学習教材の内容

章	タイトル	概要
第一章	２１世紀型コミュニケーション力とタブレット端末の活用	1)21 世紀型コミュニケーション力の定義と解説 2)タブレットパソコンを使用する狙いと使用方法 3)タブレットパソコンを使用する際の注意点
第二章	各地域、学校の事例から	1)教師の役割 　－松戸市立馬橋小学校の事例－ 2)一人一台環境での協働学習 　－松阪市立三雲中学校の事例－ 3)地域全体での取り組み 　－鳥取県岩美町の事例－ 4)思考・表現ツールを重視したコミュニケーション力の育成 　－熊本県高森町の事例－
第三章	２１世紀型コミュニケーション力の研修	1)研修パッケージを活用した研修 2)研修会モジュール

５．成果発表会

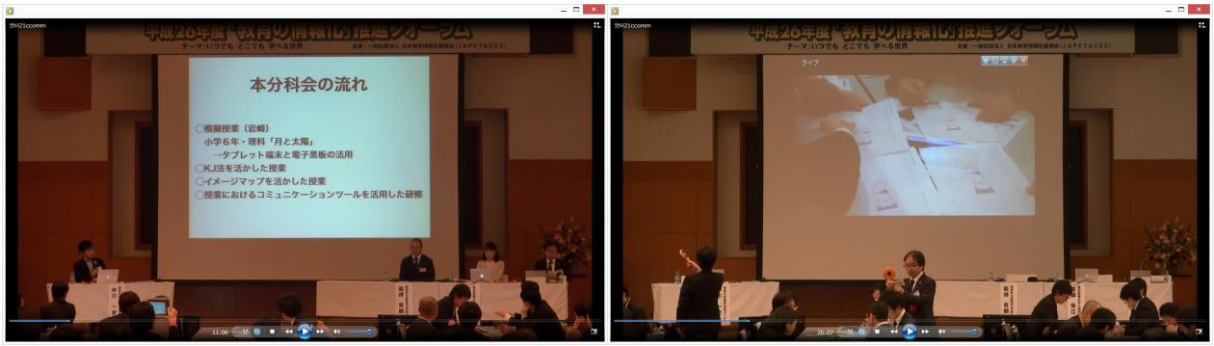
当事業の活動内容を広く広報するために、平成２６年度 JAPET&CEC 教育の情報化推進フォーラムにおいて「授業におけるコミュニケーションツールの活用　～タブレット端末活用模擬授業とパネルセッション～」と題して分科会 H を開催した。

分科会の概要は以下の通りである。

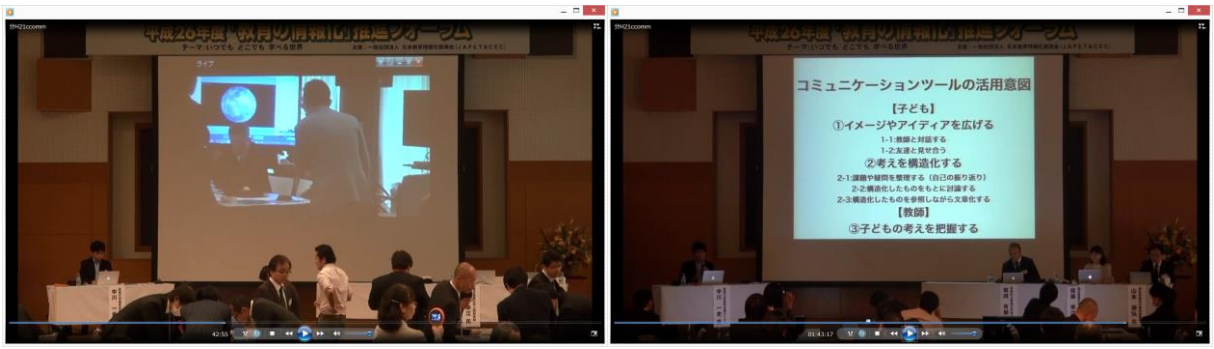
・開催日時　　平成 27 年 3 月 7 日　 9 時 30 分～11 時 30 分
・国立オリンピック記念青少年総合センター　国際交流棟
・来場者数　　ワークショップ参加者　　40 名
　　ワークショップ非参加者　 100 名
・プログラム　タブレット端末を使った模擬授業
　　授業のポイント説明
　　パネルセッション

図表３１　成果発表会の様子　講義

図表３２　成果発表会の様子　ワークショップ



図表３２　成果発表会の様子　パネルセッション



６．まとめ

本研修は、「ＩＣＴ社会におけるコミュニケーション力の育成」を、学習活動の中にどのように取り込んでいくか、その取組を支援する研修を企画しました。

今年度は、全国の教育委員会や学校において、１１ヵ所１９回開催しました。

第一回目の研修で、コミュニケーションツールを活用したワークショップを実際に体験し、第二回目の研修で、一回目の研修で習得したコミュニケーションツールを活用した授業を実践した。授業後、校内研究会として授業者と学校内の先生方で授業検討会を開き、その中でもブレーンストーミングやＫＪ法を用いて、良かった子点、課題となった点、また、その改善点等忌憚のない意見が多数あがった。詳細は、前述の３項(2) セミナー開催団体の所感を参照していただきたい。

１１地域に対し９地域で実践授業を行い、コミュニケーション力育成実践例が出来た。その内容も随時公開していく。

また、受講された教育委員会／学校に対し、受講者のアンケートとは別に、以下の３点を記述式で回答してもらった。

１．研修の狙い
２．考察
３．研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのか）

研修の狙いで一番多かったのは、「子どもたちのコミュニケーション能力を育成していくには、コミュニケーションツールを実際の授業でどのように活用していくのか」ということでした。

また、考察の中では、

・一斉授業を中心に行っていた本校の授業形態を，班単位・グループ単位にして活動をする方が，コミュニケーション力を高める際に有効であること，その際に思考ツールとしての付箋をもちいることが，コミュニケーション力を高めることにつながることが，理論的に理解できた点が良かった。
・付箋を利用して意見を述べ合う方法は，どの子も意見が言いやすく，全員参加の授業になりやすい。
・じっくりと時間をかけて，個々の考えをお互いに聞くことができたこと，そして整理の仕方を詳細に教えていただいたことは，今後の研究に役立つことであろう。また，この方法は，人の意見をじっくりと聴き，尊重することが根底にあることも教えていただいた。まさしく人を大切にする教育方法である。

思考ツールを活用することは、子どもたち一人一人のコミュニケーション力を高めるために有効であると多くの意見をいただいた。

そして、研修後のアクションとしては、

・コミュニケーションツールを活用した授業を実践する機会が増えた。
・子どもたちのそれぞれの立場から根拠となる資料を提示しながら、自分の意見を述べる姿が見受けられた
・少人数グループを構成することで、一人一人の意見を取り上げやすくなった。
・授業の中で、生徒にブレーンストーミングやポスター発表を行わせる場面が増えた。

等の意見もいただいた。

２回研修を開催したことにより、研修を受講しただけで終わらず、研修内容を活かした授業を確実に実施することが出来、成果として非常に大きい。また、今年度の研究活動にとどまらず、来年度も継続してコミュニケーション力の育成を研究テーマとして活動し、各学年で実践事例を作っていきたいという学校もあった。

７．次年度へ向けて　継続とさらなる定着

学習活動へのさらなる定着をするために、具体的な授業提案をサポートする「授業マイスター」を選定し、研修後の授業提案や授業実践を全面的にサポートしていく内容を検討中である。

また、１０種類の研修モジュールと６種類のコミュニケーションツールの研修コンテンツを公開してきたが、現場で活用が多い「ＫＪ法」「イメージマップ」「ホワイトボード」「タブレット端末」の４つに絞り、内容をさらに充実させていきたいと検討中である。

第３章
ネットの使いすぎ撲滅のための事業

１．事業の目的

インターネットは、社会生活の一部となり、買い物や予約申込み等は電話よりもむしろインターネットを利用して行い、インターネット無しでは考えられないというほど、社会生活に浸透している。また、スマートフォンがフィーチャーフォンを上回って普及する現状では、インターネットへの入り口となる端末は、パソコン、携帯電話からスマートフォン、タブレット端末、ゲーム機、音楽プレーヤーのように多様化すると同時に、いつでも、どこでも、誰でもインターネットに接続して、利用できるものとなっており、児童・生徒は保護者の目の届かないところで利用できるようになった。

このように身近になったインターネットであるが、その利用により手軽に多くの情報を入手したり、見知らぬ人々とコミュニケーションを取ったり、自宅での買い物も手軽にできるなど、様々なことが手軽にかつ安全安心にできるようになると同時に、もう一方では児童・生徒が SNS や無料ゲームなどのコミュニティサイトで犯罪などに巻き込まれる事例も発生している。

JAPET&CEC では、児童・生徒の安全安心を願い「教育現場の ICT 安全安心対策事業」を展開しており、この中の一つの事業として「ネットの使いすぎ撲滅のための事業」を実施している。

あらゆる分野で、大人だけでなく児童・生徒を対象としたネットサービスが提供されている一方で、使い過ぎで心身に異常をきたす児童・生徒の事例も報告されている。一般にネット依存と言われているが、専門家は次の三つに細分化して研究している。

1)つながり依存
・メールや SNS で四六時中メッセージを交換していなければ我慢できなくなる状態のこと
2)ゲーム依存
・ネット対戦ゲームやソーシャルメディア、SNS に付随しているゲームなどにはまっている状態のこと
3)コンテンツ依存
・ショッピングサイトや動画投稿サイトを対象としたネットサーフィンの度が過ぎる状態のこと

いずれの場合も度を超すと病気と診断され、専門的な治療が必要となるが、我々は児童・生徒が病的になる前に発見し、救いの手を差し伸べることができるのではないかと思い当事業に取り組んでいる。児童・生徒（大人を拒むものではない）が自分自身で操作入力することで、ネット依存傾向を把握でき、少しでも改善の方向へ進むことができるツールを準備した。

２．作業項目とスケジュール／作業体制

(1) 作業項目とスケジュール

作業項目とスケージュールは下記の通りである。

図表１　作業スケジュール

	平成２６年									平成２７年		
作業項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
委員会開催		▼① 15		▼② 17			▼③ 9		▼④ 22			
弁別指標開発			▲----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------▼			
学習教材開発				▲----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------▼	
成果発表会												▼ 6

(2) 委員会の設置

本事業では有識者で構成する「オンライン・ベターライフ促進委員会」を組織して作業に取り組んだ。この委員会は、作業スケジュールの策定、弁別指標の開発、学習教材の開発、成果発表会での報告等、本事業の全体を管理した。

また、弁別指標の妥当性確認のためのアンケート結果のデータ化、コンテンツ開発の実作業等は事務局が担当した。

図表２　委員一覧（顧問／委員長以外は五十音順）

所属	役職及び氏名
白鷗大学	学部長　赤堀　侃司（顧問）
東京大学	教授　橋元　良明（委員長）
エンジェルズ・アイズ	代表　遠藤　美季
一般社団法人　インターネットユーザ協会	代表理事　小寺　信良
柏市立柏第二小学校	教頭　佐和　伸明
筑波大学	教授　土井　隆義
千葉大学教育学部附属中学校	主幹教諭　三宅　健次
帝京中学・高等学校	教諭　三輪　清隆

図表３　事務局等の体制

所属	役職及び氏名	役割
一般社団法人 日本教育情報化振興会	専務理事　鶴田　雅文	責任者
同上	事務局　次長　藤本　康雄	総括
同上	調査研究開発部　調査担当部長　田中　充	アンケート集計
同上	調査研究開発部　シニアエキスパート　宮原　克彦	アンケート集計
同上	総務部　総務担当部長　赤松伊佐代	ＪＫＡ対応
東京大学大学院	堀川　裕介	弁別指標開発
株式会社ユーミックス	代表取締役　藤田由美子	学習教材開発
株式会社 工画堂スタジオ	ディレクター　門野　孝介	学習教材開発
株式会社コドモット	代表　渡邉　純子	学習教材開発

(3) 委員会の開催

委員会は二カ月に１回の開催を基本としたが、検討すべき議題に応じて適宜日程を前後させた。また、急を要する場合にはメールによる検討・決議を行った。年度を通じて計四回の委員会を開催したが、それぞれの開催日、議題は下記の通りである。

図表４　委員会開催実績

開催回数	開催日	議題
第一回	26. 5.15	・従来指標(ヤングの基準)の問題点の洗い出し ・新しい弁別指標の検討 ・学習教材の検討
別途作業	26. 6～ 26. 7	・千葉大学附属中学校で「生徒の考える依存」検討会実施 ・帝京中学校・高等学校で「生徒の考える依存」検討会実施 ・弁別指標のアンケート化
第二回	26. 7.17	・アンケートの検討 ・学習教材のシナリオ検討
別途作業	26. 9～ 26.10	・千葉大学附属中学校でアンケート実施 ・帝京中学校・高等学校でアンケート実施 ・アンケート結果のデジタルデータ化 ・アンケート結果の集計 ・弁別指標の妥当性検証
第三回	26.10. 9	・アンケート結果の報告 ・アンケート改訂の検討 ・弁別指標の妥当性検証の報告 ・弁別指標の改訂の検討 ・学習教材のシナリオ検討
別途作業	26.11～ 26.12	・千葉大学附属中学校で改訂版アンケート実施 ・帝京中学校・高等学校で改訂版アンケート実施 ・改訂版アンケート結果のデジタルデータ化 ・改訂版アンケート結果の集計 ・改訂版弁別指標の妥当性検証
第四回	26.12.22	・改訂番アンケート結果の報告 ・改訂版弁別指標の妥当性検証の報告 ・学習教材のシナリオ報告

３．弁別指標の開発

従来、ネット依存の判定には米国のキンバリー・ヤング(Kimberly Young)博士が作成した 20 項目の指標などがよく用いられてきた。しかし、専門家からは、キンバリー・ヤング博士が指標を作成する際に参考にしたのはギャンブル依存だったことや、前述のようなネット利用の多様化には対応していないなどの点で、現代のネット依存を判定するには、不十分といった意見も挙げられている。

また、各種の調査から、

・ネット以外に居場所のある人の方が、ネット以外に居場所の無い人より、利用時間が長い
・人間関係に恵まれている人の方が、人間関係に恵まれていない人より、利用時間が長い
・スマホの利用時間を調査すると 13 才(中学一年生)と 16 才(高校一年生)にピークがある
・文科省の H26 年度調査では中学三年生の 30% 程度はネットの利用時間が 2 時間を超えている
・メールより SNS をよく利用する

がわかっている。「大人が考えるネット依存」と「子どもの考えるネット依存」は異なるのではないかと仮定し、中学生高校生が考える「ネット依存と思う行動」を聞き取り調査し、指標に取り込むこととした。例えば、

・ながらスマホ(風呂　トイレ　食事　などの際でもスマホを使っている)
・メッセージに対する返答がいつも素早い
・ゲームキャラの成長レベルが頭抜けている

等である。

これらのことを踏まえ当委員会では、ヤングの指標も参考にしながら、図表 5 に示すようなネット依存の三分類を弁別できる指標の開発に取り組んだ。

1)質問 01～23 に対して、Yes または No で回答する。
2)それぞれの質問には、つながり/ ゲーム/ コンテンツ依存の三分類毎の依存度が設定されており(配点は質問によって異なります)、Yes と回答した質問のみの点数を合計する。
3)また、23 の質問とは別に三分類の利用時間を尋ね、上記で求めた依存度に対してそれぞれ掛け合わせる。これを 100 点満点に換算する。
4)例えば、つながり依存傾向 60 点、ゲーム依存傾向 40 点、コンテンツ依存傾向 70 点と計算される。
5)最後に図表 6 に示すような判定結果を表示し、自分の依存傾向を把握する。

千葉大学教育学部附属中学校と帝京中学校・高等学校の協力を得て、数百名にアンケートに回答頂き、弁別指標の妥当性と信頼性の確認を行った。一部の問いに文言訂正が必要なことが判明したため、文言訂正後、再度アンケートに回答頂いた。

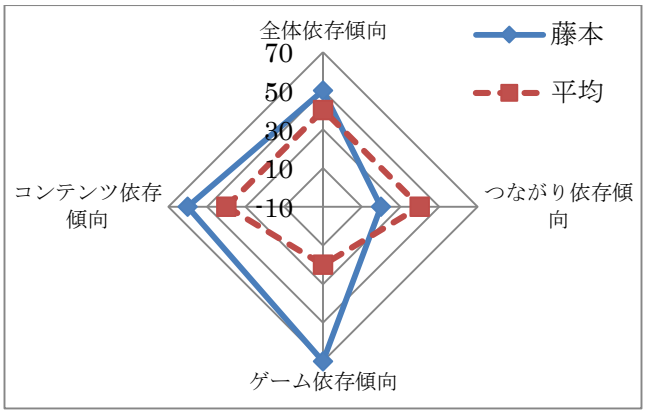
今年度は数百名単位のサンプルによる妥当性検証が終わった段階であり、今後も弁別指標改訂の予定があるとともに、印刷物では重み付けの自動計算はできないが、「はい」が多ければ依存傾向が高くなることにかわりないので、一度ご自分についてチェックして頂きたい。また、WEB 上で判定できるツールも公開しているのでそちらも試して頂きたい。

図表５　弁別指標一覧

No	質問	Yes	No
01	LINE などのメッセージにはどんな時でもすぐに返信する	○	
02	LINE などでやり取りしているとき、相手からのメッセージの返信が遅いとイライラする	○	
03	他のことをしているときでも、LINE などにどんな話題を投稿しようかということばかり考えている		○
04	友だちからのメッセージが気がかりで LINE などを常に確認している		○

05	仲間はずれにされたくないので、気が乗らないときでもLINEなどで友だちとやり取りするのをやめられない		○
06	ネットをしているときが一番安心する		○
07	他のことをしているときでも、ついネットのことを考えてしまう		○
08	友だちと過ごすよりネットをしていたいと思うことがある		○
09	外で遊んだり課外活動に行ったりするよりも、家でネットを楽しみたい		○
10	ネット上のアプリやコンテンツ（ゲーム、音楽、LINE のスタンプなど）に課金することがよくある		○
11	他にやるべきことがあってもネットをやめられない		○
12	ネットをしていて、気がつくとかなり時間がたっている	○	
13	現実世界の嫌なことを忘れるためにネットをしている		○
14	ネットをしている最中に邪魔されるとキレそうになることがある		○
15	起きている間中、ずっとネットをしている	○	
16	誰かと話している最中でもネットをしている		○
17	風呂やトイレでもネットをしている	○	
18	歩いている最中や自転車を運転している最中でもネットをしている	○	
19	あと少しと思いながら深夜までネットをしてしまい、寝る時間が無くなることが多い	○	
20	ネットができないと不安で落ち着かない		○
21	学校の成績が下がった原因はネットのやりすぎではないかと思う	○	
22	よく「ネットのやりすぎ」と注意される	○	
23	ネット以外の趣味や楽しみがない	○	

図表６　あなたの依存傾向の詳細



４．学習教材の開発

(1) 学習教材の開発

中学生・高校生が自ら入力することで自分の依存傾向を把握できる教材(教材番号１)と、ネットにはまっている主人公にどのようなアドバイスができるかをグループで討議するための教材(教材番号 2-1 2-2 2-3)を開発した。学習教材の概要は以下の通りである。

図表７　学習教材一覧

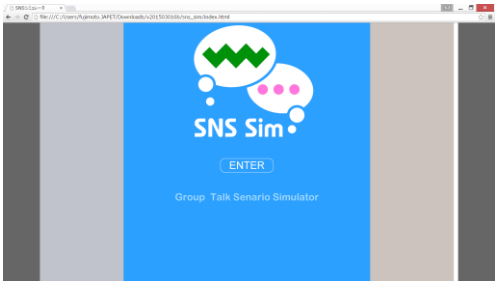
教材番号	教材名	概要
１	ネットライフチェック	・ネットの利用に関係する 23 問のアンケートに回答することにより、ネット依存傾向を把握できるようになっている。
２－１	SNS シミュレータ１	＊ 以下の 3 つの教材は、グループチャットをしている様子を視聴し、それぞれ悩んでいる主役に対してのアドバイスをグループで討議できるようになっている。 ・主役:ぽんた ・グループチャットをなかなか止められないケース
－２	SNS シミュレータ２	・主役:乙姫 ・グループチャットについていけないで、どうしようか迷っているケース
－３	SNS シミュレータ３	・主役:ムサシ ・複数のグループチャットに入っており、忙殺されているケース

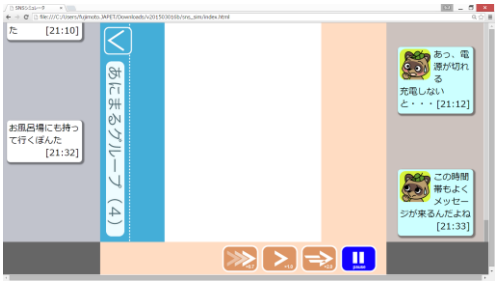
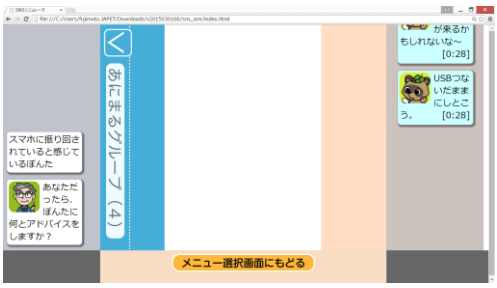
図表８　ネットライフチェックの流れ

場面	イメージ	概要
０１		・学習教材のトップ画面。 ・ネットライフチェックもしくは SNS シミュレータを選ぶ。
０２		・ネットライフチェックのトップ画面。

０３		・「ネット」の意味の再確認。 ・パソコンやスマートフォンから Web サイトを閲覧したり、メールやメッセージの交換、無料通話アプリを利用したりすることを指す。
０４		・ネットの利用時間をそれぞれ入力する。 ・メールやメッセージをやりとりする時間。 ・ネットでゲームをする時間。 ・動画を見たり、ブログを見たりする時間。
０５		・アンケート項目に回答する。 ・CHECK1～23 まで入力する。
０６		
０７		・依存傾向の度合いを表示する。 ・つながり依存度　30 ポイント。 ・ゲーム依存度　　52 ポイント。 ・コンテンツ依存度 44 ポイント。
０８		・入力した回答の一覧を表示する。 ・自分の依存傾向の診断結果を踏まえ、その要因を探るために項目毎の回答を振り返ることを可能としている。

図表９　ＳＮＳシミュレータの流れ

場面	イメージ	概要
０１		・学習教材のトップ画面。 ・ネットライフチェックもしくは SNS シミュレータを選ぶ。
０２		・SNS シミュレータのトップ画面。
０３		・三種類のストーリーがあるので選択する。 ・ぽんた：グループチャットをなかなか止められないケース ・乙姫　：グループチャットについていけないで、どうしようか迷っているケース ・ムサシ：複数のグループチャットに入っており、忙殺されているケース
０４		・ぽんたのケース ・毎日グループトークを楽しんでいるぽんたは、今日もグループトークのメッセージから目が離せない。
０５		・友達のメッセージの速さに驚きながらも遅れないようにしようと思っているぽんた。

０６		・食事中にも関わらずグループトーク。ついにお母さんから注意されてしまった。
０７		・風呂場にもスマホを持って行くぽんた。
		・布団の中でもスマホ。
		・この状況を見て、ぽんたへのアドバイスを考えよう。

(2) 学習教材を利用しての所感

・三輪委員の談話

生徒にネットやモラルのことを指導する場合には、冊子ベースの教材では時期を逸するので、インターネット上の教材を使用することが多く、今回開発した教材も違和感無く試験的に生徒に使ってもらった。

SNS シミュレータは、自分のことはわからなくても、第三者的に捉えると問題がよくわかり、それぞれの主人公に対して多様なアドバイス案が出された。

つながりチェッカーの使用後に得点の高い生徒へ聞き取り調査を行った。生徒も教師に相談したかったが機会がなく、今回の試験利用をトリガーとして教師に相談することができ、教師としてのアドバイスができたと考える。

・当社団が主催する他の委員会の有識者の談話

依存度判定の精度向上を図るべき、画面操作の迅速化、判定後に被験者へアドバイスする仕組が必要等の意見が出された。

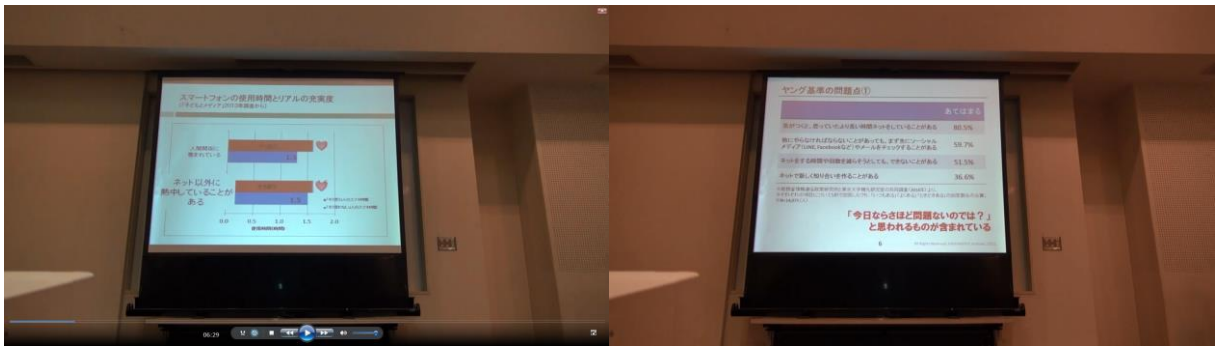
５．成果発表会

当事業の活動内容を広く広報するために、平成２６年度 JAPET&CEC 教育の情報化推進フォーラムにおいて「オンライン・ベターライフ促進　～子どものつながり依存傾向を見つけよう～」と題して分科会Ｃ を開催した。

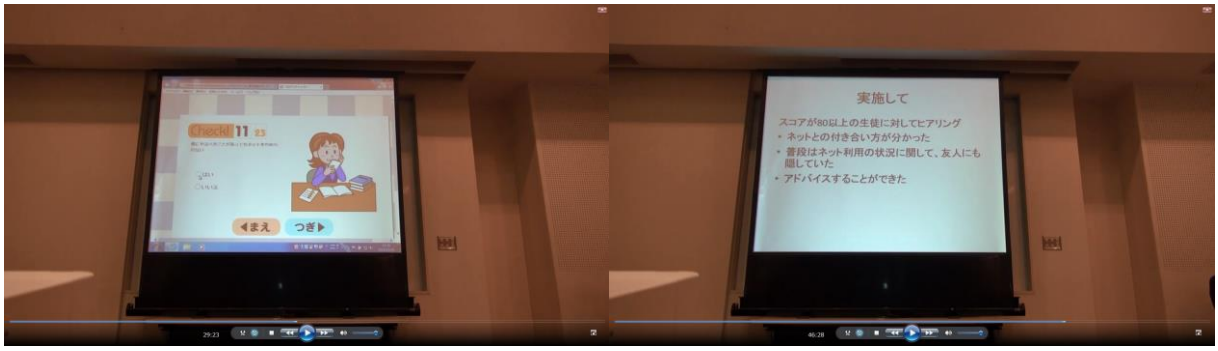
分科会の概要は以下の通りである。
・開催日時　　平成 27 年 3 月 6 日　14 時 10 分～15 時 10 分
・国立オリンピック記念青少年総合センター　国際交流棟
・来場者数　　80 名
・プログラム　つながり依存とは何か、社会的な背景
　　つながり依存識別指標の開発
　　高校生の状況
　　つながり依存判定アプリケーションの紹介

図表３０　成果発表会の様子　講義その１

図表３１　成果発表会の様子　講義その２



図表３２　成果発表会の様子　講義その３



６．まとめ

(1) 指標の改善

現行の指標にはなお次の課題が残されている。

1) 各項目の配点

各項目の依存度の配点には過去の調査データからの裏付けがあるが、一部の項目は今回新規に作成したものもあり、それらについては配点の裏付けが十分ではない。

2) 得点計算方法

現在「基礎得点」と「ネット利用時間得点」を掛け合わせているが他の方法も幅広く検討するべきである。また対数化も 11 月までに行った 2 回の検証結果を踏まえたものではあるが、調査データの一般性に限界があるため妥当性の検証が十分とは言えない。

3) 冗長項目の削減と文言のさらなる修正

中高生向けの利便性を向上させるためには、意味内容が似通った項目の統廃合が必要と考えられる。また文言についても、指示内容を明確にする、難しい用語を減らすなど一層の改善が求められる。

これらの課題解決のため、次年度の JAPET&CEC オンラインベターライフ促進事業として 1,000 名以上の大規模標本でアンケート調査を行うことを計画している。この調査により指標の配点について同一データからの一貫した根拠を得るとともに、得点計算方法、項目構成、文言内容についても改善点を探る。

(2) ウェブコンテンツの普及

開発した学習教材を中学・高校でパイロット的に利用する機会を設け、情報教育における普及を目指す。また問題点や教育その他における活用方法についてフィードバックを得て、さらなる改善につなげる。

今後は、本事業の成果物を生かし、より多くの先生方が講師となって、家庭や地域での「情報モラル教育」がさらに普及していくことを期待している。

教育現場のICT安全安心対策事業　実施報告書

発行・著作　一般社団法人日本教育情報化振興会
〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13　三会堂ビル8階
TEL 03-5575-5365
FAX 03-5575-5366
http://www.japet.or.jp/

禁
無
断
転
載

JAPET & CEC